

こ こ

齒音にして單子音の一つ。

この濁音。

こごこ 子。兒(名)

「一」親の生みたるもの。●本より分れたるもの。「二」子孫。●末孫。「三」幼き人。●

子ども。「四」他人を親愛していふ詞。○紐

「大橋のつめの月見にいでませ子」萬葉い

さや子ら早も大和へ白菅の眞野の榛原待ち

つゝあらむ「五」男子と分つ爲め女の名の

下に添へていふ詞。○「竹子」「花子」

こ 籠(名)

物を極めて細かく碎きたるもの。●細末。

こ 蠶(名)

かひこ。

こ 海鼠(名)

海産動物の名。其乾さざるを生海鼠なまこといひ

其乾したるをきんてさいひ其腸をこのわた

さいふ。

木の轉。○「木枯」「木陰」

こ 孤(名)

簾を卷き上げて留むるためのかぎ。(枕)

こ 個。箇(名)

こ 此(代)

こ 故(形)

こ 小(形)

こ 來(自動)

こ 語(名)

こ 碁(名)

こ 後(名)

こ 御(名)

こ 期(名)

こ 午(名)

こ 御(形)

こ 五(數)

物を數ふる詞。●こ。●こ。○「行李二個」これに同じ。

死したる。●亡○「故宮」「故姫君」

小さき。●少しの。

くの變化。○「尋れてさびこ」「風も吹きこす」

「一」言語。●言葉。「二」故人の金言。○

「語に曰く」

遊戯の名。黑白の石を盤に並べて二人勝負

を競ふもの。●圍碁。

のち。

「一」親族の尊稱。○「父御」「母御」「叔父御」

「叔母御」「姉御」「二」女の尊稱。○「伊勢の御」「槍垣の御」

きに同じ。●際。●をり。●期限。○空穗

「子うみ給ふべき」近くなりぬれば」

まひる。●正午。

尊稱形容詞。おんさ同意にて多くは漢語より來れる詞に冠らせて用ふ。○「御苦勞」「御來車」「御詠歌」「御本」

いつい。

こゝ 古意(名) 古人の思想。

こゝい 故意(名) わざとすること。●其結果の他に不利な

らしむるを知らながら事をなす事。

こゝぬ 木居(名) 鷹のさまる木。

こゝひ 鯉(名) 川魚の名。形は鮪に似て細長く色黒く鮮

にして其味殊に美なるもの。鱗は體の大小

に拘はらず頭より尾までに三十六枚なり。

故に六六魚なごゝも云ふ。

こゝい 鶴(名) 鳥の名。くゞひ。

こゝい 戀(名) 「一」戀しく思ふ事。●愛。「二」特には男

女の愛。●戀慕。●痴情。

こゝい (自動) 命令の詞。來れ。○「やってこい」(俗)

ごゝ 五位(名) 臣下の位階の第五番目に當たるもの。

維新前は正從上下の四等。維新後は正從の

二等のみ。

こゝいぢ 戀路(名) 戀の路。

こゝいぢから 戀力(名) 戀の力。

こゝいぢ 濃茶(名) 挽茶の一種。量を多くして濃くした

るもの。

こゝい わづらひ 戀煩(名) 戀病。

こゝい (代) 此奴に同じ。

こゝいねがはくは 冀。希。庶幾(副) 乞ひ願ふには。

●何卒して。●ごうぞ。

こゝいねがふ 冀。希。庶幾(他動四段) 深く希望する。

こゝいね 故院(名) 崩御になりたる上皇。又は女院。

こゝいん 五音(名) 「一」五十音圖の縦行の五字。……「あ

いうえお」かきくけこの類。「二」音楽上の

こゝいんじ 五種の音調。宮、商、角、徵、羽。

こゝいんじ 胡飲酒(名) 雅樂の曲名。

こゝいんじ 戀占(名) 戀慕の結果の成否を卜するための

こゝいんじ 占ひ。(月詠集) 戀重荷(名) 戀の身を苦しむるを重荷を

こゝいんじ 持つに喩へて云ふ。 戀の染木(名) 染木および錦木を見よ。

こゝいんじ 戀の奴(名) 請ひ祈る。(萬葉)

こゝいんじ 戀の奴(名) 心が戀慕のために使役せら

こゝいんじ れて奴隷となる事。(萬葉)

こゝいんじ 戀の山(名) 戀の積りて深きを山に喩へて

云ふ。(雅)

こゝいんじ 戀の病(名) こゝいんじに同じ。

こゝいんじ 戀の煙(名) 戀の燃ゆるを火に喩へて

云ふ。(堀川)

こひいのみづ

戀の水(名) 涙。

こひいのみ

戀の耳(名) 戀人の耳。(六帖)

こひいぢち

鯉口(名) 刀の鐔と鞘と合ふ所。○「刀の鯉口くつろけて」

こひいぐさ

戀草(名) 「一」戀の茂きを草に喩へていふ。

こひいぢみ

戀病(名) 戀慕の餘りに起る病。

こひいぢろぶ

(自動四段) こひふすに同じ。(雅)

こひいぢす

(自動四段) ころび伏す。●伏しまるぶ。(雅)

こひいぢろも

戀衣(名) 戀人のきる衣。

こひいぢころ

戀心(名) 戀する人の心。●戀しく思ふ心。

こひいぢぢぢ

五位鸞(名) 鳥の名。鸞の一種にして背の色青黒きもの。◎醍醐天皇神泉苑行幸ありける時。此鳥池の汀に居たりしを取りて参ら

せよとの宣旨により。藏人近づき取らんさせしに今や羽づくろひして既に飛ばんさす。藏人宣旨とぞ聲を掛ければ遂に飛ばずして取られしにより叙感のあまり叙辭せられしさいふ故事より起れる名。

こいし

小石(名) 小さき石。●砂利。

こひいし

戀(形。形状言シク活) 戀ふる有様。●慕はし。

こいし

碁石(名) 圍碁に用ふる黑白の丸く平たき小石。

こいしがしら

碁石頭(名) 鐘の札の名。碁石を並べたる形。(圖)

こひいしらに

(副) 戀しく。●戀しく思ひつゝ。○玉葉「霞ふり檜の落葉に風ふきてものこひしらにさ夜がふけゆく」

こひいびと

戀人(名) 「一」戀をする人。「二」戀しく思ふ人。

こほ

(名) 子等に同じ。(萬葉東歌)

こほ

頃(名) 月日を大凡に指す詞。●時分。●ほど。

こほ

吳縞(名) 舶來毛織物の一種。

こほ

語彙(名) 「一」言語文章の口調。「二」地口の類。

こほちぢぢわん

五郎八茶碗(名) 茶漬茶碗の一種。大きくして粗末なるもの。

こほばかす

(他動四段) ころばすに同じ。

こほばす

(他動四段) ころばしむる。●ころがす。●倒れしむる。

こほり

虎狼痢(名) 病の名。虎列刺に同じ。

こほひい

頃(名) こほに同じ。



ころがる (自動四段) ころぶ。●まるぶ。

ころがき (名) 食品の名。漆柿の皮を去り日に干して

ころがす (他動四段) ころがらしむる。●まるげす。

ころがす (自動四段) ころげす。

ころがす (自動四段) 爲す事もなく遊び暮す。(俗)

ころがす (名) 定まりたる住所職業もなき男。●無頼漢。

ころがす (名) 寐卷をも着すして其儘寐る事。

ころがす (名) 固陋(名) 見聞の狭き事。△(形)―固陋な。

ころがす (副)―固陋に。

ころがす (名) 鼓樓(名) 神社の建物にて太鼓を打つ樓。

ころがす (名) 古老(名) 老人。●年寄。

ころがす (名) 虎狼(名) 虎と狼と。

ころがす (名) 織物の名。吳絹に同じ。

ころがす (名) 小娘子(名) 雅樂の曲名。

ころがす (自動サ變) 御覽すに同じ。●御覽になる。

●見給ふ。

ころがす (名) 胡籀(名) やなぐひに同じ。

ころがす (感) 鳥の鳴く聲。(萬葉東歌)

ころがす (自動下二段) ころがるに同じ。

ころがす (名) 小六月(名) 小春に同じ。

ころころ (副) 鈴の鳴る音。(又)―ころ／＼と。(堀

ころころ (川)(又)―ころ／＼に。(夫木)

ころころ (副) ころがる有様。(又)―ころ／＼と。

ころころ (副) 雷鳴などの響く音。(又)―ころ／＼と。

ころころ (自動四段) まるぶ。●ころがる。●倒るい。

●ころ／＼する。

ころがす (他動四段) 大聲にて叱る。(古)

ころがす (自動四段) 轉び伏す。(萬葉)

ころがす (副) 丁度其時。●時しも。●折しも。

ころがす (名) 大聲にて叱る事。(紀)

ころがす (名) 轉寐(名) ころれ。●轉寐。●假寐。

ころがす (名) 衣(名) 〔一〕着物。●衣裳。●衣服。〔二〕僧の

着る服。●法服。〔三〕すべて衣の如く物の

上を被ふもの。

ころがす (名) 衣偏(名) 漢字の偏の名。袖、袂、裾などの

左の部分。

ころがす (名) 更衣(名) 〔一〕春の衣を脱ぎて夏の衣に着

替ふる事。太陰曆の時代には四月朔日に之

を行ふ。〔二〕秋の衣を脱ぎて冬の衣に着替

ふる事。太陰曆の時代には十月朔日に之を

行ふ。〔三〕催馬樂の曲名。

ころもつみ

衣包(名) 風呂敷の類。

衣の玉(名) 法華經にある故事。佛に逢ひて其敷を聞き得る身に生まれながら之を心に留めずして空しく月日を送るの喻。本文に曰く。譬(ハシ)如(シ)有(ル)人(ト)至(リ)親(レ)友(ト)家(ニ)而(シ)臥(ス)是(レ)時(ニ)親(レ)友(ト)以(テ)無(ク)價(ト)寶(ト)珠(ト)擊(ツ)其(レ)衣(ト)裏(ト)與(テ)之(ト)而(シ)去(ル)其(レ)人(ト)醉(レ)臥(ス)都(テ)不(レ)覺(レ)知(ル)。

ころもで

衣手(名) 袖。(歌詞)

衣手(枕) 常陸の枕詞。

ころもでの

衣手の(枕) 田上山(地名)高屋(地名)なごの枕詞。(萬葉)

ころす

殺(他動四段) 死なしむる。●命を取る。

ころすけ

(名) 鳥の名。梟の一名。(俗)

ごは

五派(名) 禪宗の五分派。曹洞、臨濟、雲門、法眼、臨仰。

こぼる

小春(名) 太陰曆十月頃の季節。此頃晴天多く暖にして彌生の頃に似たる故の名。

こばかま

小袴(名) 「一」古へ素袍の下に着たる袴の名。差貫に似たるもの。「二」半袴に同じ。

こはた

小鰯(名) 魚の名。鰯の小さきもの。

こはた

樸(名) 木の皮。(和名抄)

こはた

小旗(名) 小さき旗。

こはん

小判(名) 徳川時代金貨の名。形は楕圓にして表裏に種々の文字極印等あり。一枚一兩に相當するもの。

こばん

小鷗(名) 鳥の名。鷗の一種にして形小さきもの。

こばむ

拒(他動四段) 「一」防ぎ止むる。「二」承諾せぬ。

こはん

午飯(名) 晝飯。●中食。

こばん

碁盤(名) 碁の具。縦横の線を引きたる四角の盤。

こばんなり

小判形(名) 小判の形。●楕圓形。

こはく

琥珀(名) 寶玉の一種。古代の樹脂などの變化せしもの。其上品なるものは鮮黄色にして透明なり。

こはくおり

琥珀織(名) 絹織物の一種。多くは帯又は羽織等に用ふる地の厚きもの。

こはやし

小早(形) 形狀言ク活) 少しく早し。

こはぎ

小萩(名) 萩に同じ。(歌詞)

こはじごみ

小半蒨(名) 半蒨の小さきもの。

こはせ

(名) 足袋脚半などに附け縁にかけて釦の如く留むるもの。

ごにち

後日(名) 後の日。●将来の日。

こには

小庭(名) 「一」小さき庭。○宇治「侍の立並の前の小庭に立ちけるを」 「二」古へ禁中にて

殿上の小敷敷の前の庭。又其處にある下侍

二間の建物。○盛衰「布衣のつばものを殿

上の小庭に召し置き」日中行事「朝の御膳

は午の刻なり。それよりさき日次の御費ま

ゐらせたらば小庭の御膳棚に置く」

小荷駄(名) 馬に附くる荷。

こにだ

菟藟(名) こんにやくに同じ。(和名抄)

こにき

國王(名) 外國の國王。

こぼる

毀(自動下二段) こはれる。●くづれる。●破る。

こぼる

溢(自動下二段) あふれ流る。●あふれ出づる。●餘りて外へ出る。

こぼれざうばひ

(名) 思ひも寄りぬ仕合せ。●幸運。●僥倖。

こぼつ

毀(他動四段) こはす。●くづす。●破壊する。

こほん

古本(名) ふるほん。

こほん

小本(名) 「一」半紙判より小さき書物。「二」人情本の一名。

こほん

情本(名) 「一」半紙判より小さき書物。「二」人情本の一名。

こば

小袍(名) 袍の一種。袖の一幅なる袍。……常

こばう

の袍は袖二幅なるに對して。

こばう

戸部(名) 民部省の異名。

こばう

牛蒡(名) 野菜の名。根は胡蘿蔔に似て色黒く。食品として常に用ひらるゝもの。

こぼふ

護法(名) 「一」佛法を守護する事。「二」佛法を守護する神。

こば

御坊(名) 僧侶を呼ぶ尊稱。

こぼく

古木(名) 數多の年月を経たる樹木。

こぼく

(副) がたく。●ごさく。●ばたく。●ごんごん。(又) こばく。

こぼめかす

(他動四段) こぼく、音をさする。

こぼめく

(自動四段) こぼく、音をさする。

こぼす

溢(他動四段) 溢れしむる。

こぼす

御幣(名) 幣の尊稱。神に奉るものゆる。

こぼす

御幣擔(名) 神佛の示現等を深く信じ些細の事をも氣に懸くる性質。又は其性質の人。

こぼす

御邊(代) あなた。●御身。●貴殿。

こぼす

事(名) わざ。●しわざ。●はたらき。●事件。●事實。●事柄。

こぼす

事(名) わざ。●しわざ。●はたらき。●事件。●事實。●事柄。

こぼす

事(名) わざ。●しわざ。●はたらき。●事件。●事實。●事柄。

こぼす

事(名) わざ。●しわざ。●はたらき。●事件。●事實。●事柄。

ことば (言(名))

ものいひ。●言葉。●言語。

ことば (琴(名))

樂器の名。「一」糸を張りて弾く物の總名。

ことば (一つ緒の琴)

「一」緒の琴。「二」緒の琴。「三」緒の琴。

ことば (四つ緒の琴)

「四」緒の琴。「琵琶」の琴。「あづまこ」の琴。

ことば (箏)

「こ」箏の「こ」。「二」特には箏。

ことば (古渡(名))

古くからある渡場。●物さびたる渡場。

ことば (異(形))

普通と變はりたる。●他の。●よその。

ことば (異國)

○「異國」「異所」「又」——こなる。(副)——

ことば (毎(副))

毎に同じ。○堀川「宿とせに朝毎稻を

ことば (如(副))

如しの略。○萬葉「思ふとち斯くし遊は

ことば (特牛(名))

へ今も見ると

ことば (特牛(名))

頭の大なる牡牛。(和名抄)

ことば (特牛(枕))

三宅の枕詞。殿毛の意に掛

ことば (事思(名))

物事を思む事。○源氏「今日は事

ことば (思してな泣い給いそ)

思してな泣い給いそ

ことば (不吉の言語を思む事)

不吉の言語を思む事。(雅)

ことば

言葉。詞。辭(名)。「一」思想を口に發したるも

の。●言語。「二」語學上にては最も單純な

思想をあらはす音の集まり。……月花お

もふうれしの類。「三」文章。○「春を惜しむ

詞」

ことば (道(名))

基督。●人に神を默示するところの神。

ことば (言敵(名))

話相手。

ことば (詞書(名))

「一」書の説明を書きたる文章。

ことば (文章にて書きたる)

「二」文章にて書きたる(簡單なる名詞のみ

に非ずして)和歌の題。●前書。●端作り。

●小序。

ことば (言葉戦(名))

言葉にて言ひ合ふ事。●

●口喧嘩。

ことば (言葉遣(名))

言葉の使用法。●物言ひ。

ことば (異腹(名))

母の違ひたる事。●腹變り。●い

ふく。

ことば (異腹の兄弟)

異腹の兄弟。

ことば (言葉尻(名))

言語の終り。

ことば (事始(名))

おこさはじめに同じ。

ことば (殊。特(副))

別に。●格段に。●特別に。●取り

分けて。

くさくさ 毎(副) 其物事のおの／＼いづれにもの意。●其度いつもの意。

くさほがひ、 (名) こゝほさに同じ。(古) 言祝(名) 祝ひ。●祝言。●賀。

くさほがひ、 (他動四段) 祝言を述ぶる。●賀する。

くさほがひ、 (副) 専ら。○蜻蛉「こゝほ、明けはてし」濱松「こゝほ、日高うなるまで大殿こもり過したるに」

くさほがひ、 (名) 夫婦の縁を切る誓。(記) 言問(自動四段) 「一」問ふ。●尋める。○伊勢「名にしおほいざこゝほは人部鳥わが思ふ人は有りや無しやま」(二)物言ふ。●話す。●語る。○祝詞式「言問ひし岩根木立」萬葉「人妻に我も交らむ。我妻に人も言問へ」

くさほがひ、 (言吃(名) こゝほりに同じ。(和名抄) 琴柱(名) 琴の柱。すなはち糸を支ふるもの。小鳥(名) 小さき鳥類。

くさほがひ、 (古鳥蘇(名) 雅樂の曲名。部領使(名) 相撲節會の時左近衛右近衛

き方を分けて國々の力士を募集に遣はさるゝ勅使。

くさほがひ、 (副) こゝほりに同じ。専ら。○古今「かきくらをこゝめん」

くさほがひ、 (理(名) 道理。●尤●其答。斷(名) 斷る事。●謝絶。

くさほがひ、 (他動四段) 「(一)理非を分けて言ひ解く。●理由を述ぶる。●わびる。斷(他動四段) 不承知なる旨を言ひ切る。●謝絶する。

くさほがひ、 (事業(名) 仕事。●事業。諺(名) 世の言ひぐさ。●喩へ話。異方(名) 異なりたる方。●他の方。●外の所。●別の場所。

くさほがひ、 (事柄(名) 其事の様子。●事態。(形) 形狀言シク活) 何か事ありけな。●事ありそうな。●事々し。

くさほがひ、 (異様(名) 異なりたる様子。●異様。●異様。△(形) 異様なる。(又) 異様の。(副) 異様に。

くさほがひ、

くさほがひ、

くさほがひ、

くさほがひ、



ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

ことば

(名) 言寄ます事。●委任。●委託。(古)

(自動四段) 言を寄せて頼む。●委ね任する。●委託する。●委任する。○祝詞式「我皇御孫尊は豊葦原の瑞穂の國を平らげく知ろしめせと言よさし奉りき」

異夜姫(名) 星の名。織姫の異名。

言寄妻(名) 戀慕して言ひ寄る女。(萬葉)

言寄(自動下二段) かこつける。●託する。●言譯にする。●口實にする。○新續古今

「宵の間は草葉の露に、こよせつ晝の袂をいかに忍ばん」

事立(自動四段) 平生ごちがひたる事をなす。●儀式めきたる事をなす。○伊勢「正月なれば事立つて大御酒たまひけり」

言立(自動下二段) 言を立つる。●明言する。●斷言する。○萬葉「かくさばぬ赤き心を、すめらべに極め盡して仕へ來る親の官ご。言立て、授け給へる。云々。あたらしき清き其名ぞ」

言靈(名) 言語の上に備はる靈魂。……我國

の言語にはおのづから靈妙不思議の活動物ありて其發したる言語が即ち其言語の意味の通りの結果を奏するを古人の信じたるより出でたる詞。たゞへば「君は千代ませ」といへば其如く千代にますの結果あらしむるの類。○玉葉「祝ひつる言靈ならば百年の後も盡きせぬ月をこそみめ」

言付(自動下二段) こよすに同じ。○紫日記「これ(歌)遅からんこのたまはするにこそつけて硯のもとによりぬ」

言付(他動下二段) 傳言する。

言付(名) 傳言。

言傳(名) こよづけに同じ。傳言。

琴爪(名) 琴を掻き鳴らす具。手の爪にはむるもの。

小舍人(名) 「一」禁中殿上に於て殿上人の召使ふ下官。給仕小使の類。藏人所に屬す。「二」中將少將の他行する時召し連る。饅頭。小舍人童(名) 小舍人なる童。

異(自動ラ變) ちがふ。●たがふ。●よそである。●外である。

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことねり

ことばます

言直(自動四段) 世上の悪評が止む。●説

言などの止む。○著聞「心の外なる事にて知らぬ國にまかりけるを、ことばなりて京に上りて」

ことならば

(副) 出来る事ならば。●希望して叶ふならば。○月詣集「ことならば花の盛を見て

かへれ越路も同じ旅の宿りを」續古今「ことならば雲井の月さなりなん戀しき影や空に見ゆる」と

ことなしぢ

言無草(名) 忍草の一名。○後撰「かさすも立ちと立ちぬる浮名にはことなしぐさのかひやなからん」

ことなしぢ

(自動上二段) 事の無きやうに見する。●他事の無さそうな顔をする。

ことなしぢ

(他動下二段) 服せしむる。●平らぐる。●平定する。○記「倭建命に。東の方十まり

二道の荒ぶる神またまつるはぬ人どもを、ことむけやはせさのりたまひて」

こととう

孤燈(名) 一つの燈火。

こととう

孤島(名) 離れ島。

こととう

古道(名) 「一」古き道路。……新道に對して。

ことどう

古銅(名) 古代の銅。

ことどう

小胴(名) 小鼓の一名。

ことどう

鼓動(名) 心臓などのごきごきと動く事。

ことどう

梧桐(名) 木の名。青桐。

ことどう

御燈(名) 「一」神佛に奉る燈火。●みあかし。●燈明。「二」天皇の北に奉り給ふ燈火。古へ三月三日と九月三日とに北山靈巖寺な

ごの高き峯の上に行はれたる御式。

ことどう

悟道(名) 悟りの道。●悟りの法。(佛教)

ことどう

後藤彫(名) 金屬彫刻の流派の名。足利時代の名工祐乘を祖とするもの。

ことどう

五等親(名) 親族の等級を分ちて五等としたる其稱へ。すなはち左の如し。

一等親 父母 養父母

二等親 祖父母 伯叔父 嫡母 繼母

三等親 姑 兄弟姉妹 夫の父母 妻妾 甥姪 孫

曾祖父母 伯叔婦

夫の甥 従父兄弟姉妹

三等親 異父兄弟姉妹 夫の祖父母

夫の伯叔姑 繼父

甥の妻

高祖父母

従祖父姑(祖父の兄弟)

従祖伯叔父姑(祖父の兄弟の子)

夫の兄弟姉妹 兄弟の妻妾

四等親 再従兄弟姉妹 外祖父母

舅(母の兄弟) 姨(母の姉妹)

兄弟姉妹の孫 従父兄弟の子

外甥姪 曾孫

孫妻

妻妾の父母

姑子(我が父の姉妹の子)

五等親 舅姨の子(母の兄弟姉妹の子)

支孫(曾孫の子) 外孫

婿 女の夫

小道具(名) 小さき道具類。

言請(名) 返事。●返答。●承諾。

こたごうぐ  
こたごけ

言の葉(名) 「一」言葉に同じ。●言語。「二」歌。●文章。

小殿原(名) 「一」少さき殿達。「二」田作たうしの異名。武家にていふ正月の祝ひ詞。

殊の外(副) 思ひの外。●案外。●存外。

女用文章の詞。殊の外。○「ここのうお」

五徳(名) 火鉢に入れて土瓶鐵瓶など載する具。

異國(名) 他國。●外國

異國人(名) 「一」外國人。「二」もとは猶

大人が外國人を輕蔑して用ひたる名稱より起りて◎異教者。●他宗の人。(基督教)

胡德樂(名) 雅樂の曲名。

言草(名) 言ひぐさ。●口ぐせ。○源氏「明暮の言草に聞え侍り」

事觸(名) 鹿島の事觸を見よ。

他動四段 「こまほぐに同じ。祝ふ。

祝(名) 祝ひ。●賀。

葦所(名) 徳川時代。圍碁の術を以て將軍家

に召出されし家。

祝ひ。●賀。

葦所(名) 徳川時代。圍碁の術を以て將軍家

に召出されし家。

祝ひ。●賀。

葦所(名) 徳川時代。圍碁の術を以て將軍家

に召出されし家。

祝ひ。●賀。

葦所(名) 徳川時代。圍碁の術を以て將軍家

に召出されし家。

異事(名) 他の事。○大鏡「世繼を申さんと

思ふ事はことごとくは」

悉(副) ことごとくの略。○萬葉「晝はも日

のことごとく」(又)「ことごとくに。○記「妹

は忘れじ夜のことごとくに」

悉(副) 一つも残さず。●すべて皆●あら

んかぎり。●總體。●悉皆。

事事し(形。形状言シク活) 大事件らし。●

大そうらし。●仰出らし。

事新(形。形状言シク活) 言ふまでもな

し。●めづらしそうに言ふに及ばぬ。

言擧(名) 物を言ひ立つる事。●理窟を述べ

立つる事。●議論。○萬葉「菅原の水穂の

國は。神ながら言擧せぬ國。然れども言擧

ぞ我する」同「我欲りし雨は降り來ぬ。か

くしあらば言擧せずとも年は榮えむ」

殊更(名) 殊更なる事。

殊更(副) 特別に。●別段に。●さりわきて。

(又)「殊更に。(形)「殊更なる。

(自動上二段) 殊更めく。●態々するやう

である。

事様(名) 事柄。●事態。

異様(名) 異なる様子。●異様。●異様。

事醒(名) 興を醒ます事。○源氏「花の

ほひもけおされて中々事さまじになん」

(枕) から(韓。唐)くだら(百濟)に掛けた

る枕詞。言さへぐば言轉るの意にて外國人

の言語は鳥の轉るやうに聞ゆるより起れる

形容。○萬葉「こささへぐ辛の崎なる」こ

ささへぐくだらの原ゆ」

琴軌(名) 雅樂の樂器。和琴を掻き鳴らす撥

に似たるもの。

蠶時(名) 養蠶の季節。(萬葉)

事行(自動四段) 事の調ふ。●埒明く。

琴師(名) 琴を造る工人。

今年(名) 現今の年。●此年。●其年。●當年。

●本年。

如(形。形状言ク活) 「一」似て居る。●やうであ

る。○「花雪の如し」雷の如き響「二」の類

である。○「我等如きの身にて」

事知(名) 物事をよく知る人。●物事の事情

によく通じたる人。

ことしおひい 今年生(名) 其年に生ずる事。○「今年生」の竹

ことしだけ 今年竹(名) 其年竹より生長したる竹。

ことびと 異人(名) 外の人。●別人。●餘人。●他人。

ことひまざり 琴彈鳥(名) 鶯の異名。

ことども 子供(名) 「一」子等。「二」子。●童。

こともの 異物(名) 別物。●他の物。●外の物。

ことばくな 事少(名) 物事の省略せられたる事。●簡易。●手短。

ことずくな 言少(名) 言語の少なき事。●無口。

こち 鰯(名) 魚の名。頭大きく身平たく尾細くして形鰯に似たる海魚。

こち 東風(名) 東の風。●春の風。

こち 此方(代) 「一」我身に近き方。●こなた。●こちら。●こ我。●おれ。●此方。

こち 五智(名) 「一」佛教にていふ五種類の智力。一に

大圓鏡智、二に平等性智、三に妙觀察智、四に成所作智、五に法界智。「二」五智を分業して各其一智を表はす五體の佛。すなはち阿闍、寶生、阿彌陀、釋迦、大日の五如來。  
〔佛教〕

ごぢ 護持(名) 佛法を守護維持する事。△(動) 護持す。

ごぢらろう 小女郎(名) 小きき女。●小娘。

ごぢちろう 戸長(名) 行政事務を扱ふ町村の長。現今は町長又は村長と稱ふ。

ごぢたふつ 胡蝶(名) 「一」蝶に同じ。「二」雅樂の曲名。

ごぢちろう 年中 延喜

ごぢちろう に出

ごぢちろう 來

ごぢちろう たる

ごぢちろう もの

ごぢちろう にて

ごぢちろう 舞は

ごぢちろう 敦賀



親王の御作に係る。童子の額に山吹の作り花を飾り蝶の羽を脊に付けて舞ふの曲なり。相撲節會の時例として此舞樂を用ひらる。(圖)

ごて、ろう 後朝(名) 男女相逢うての翌朝。

ごぢちろう 伍長(名) 五人一組の頭。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>

御誼(名) (一)尊長の命令。(二)仰せ。●御言葉。……相對する人の言語をいふ○、御誼の如く)

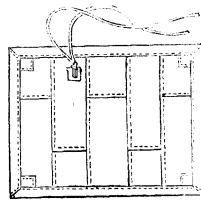
ごぢやう<sup>チヨウ</sup>ふ<sup>フ</sup>

五條(名) 袈裟の一種。五幅の布にて作れるもの。

〔圖〕

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>う<sup>ウ</sup>は<sup>ハ</sup>く

小朝拜(名) 正月元日殿上にて殿上人のみ天皇に拜



賀するの式。朝拜の略儀なれば朝拜の行はれざる年にある事なり。……朝拜を参考せよ。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>う<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>ふ<sup>フ</sup>み

後朝の文(名) 後朝に別れ歸りし後男より女に定式として贈る艶書。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>ふ<sup>フ</sup>の<sup>ノ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>め

胡蝶の夢(名) 莊周の夢中に蝶となりて遊び戯れし故事。一時の歡樂の覺むれば忽ち跡なきの喩へ。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>く

五濁(名) 佛教にていふ五種の汚濁。一に婬濁。二に切濁。三に煩惱濁。四に見濁。五に有情濁。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>た<sup>タ</sup>し

言痛(形。形状言ク活) 言葉もて言ふも痛きほごである。●大さうな。●多し。●甚し。●うるさし。○萬葉「人言を茂みごちたみ我春子を目には見れども逢ふよしもなし」

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>そう

護持僧(名) 天皇の御ために御祈禱を行ふ僧。天台宗にては延暦寺、眞言宗にては東寺の内より清行拔群のものを選びて之に任す。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>なし

骨無(形。形状言ク活) ふごつである。●無器用である。●無風流である。●無作法である(雅)

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>ち

(代) ごち。●此方。●こなた。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>ん

五塵(名) 佛教にていふ五種のけがれ。目、耳、鼻、舌、身より入り來る色、聲、香、味、觸の五つ。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>ん

後陣(名) 後備の軍勢。●後軍。●後手。●後隊。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>の<sup>ノ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>だ

此方人(名) 妻の夫を呼ぶ詞。

ごぢやう<sup>チヨウ</sup>く

胡竹(名) (一)竹の名。笛に作るもの。(二)胡竹にて作りたる笛。○蜻蛉「ごちくの聲をきくなへに」

ごちゆう

(代) あちらこちら。●彼方此方。○萬葉なまよみ甲斐の國。うちよする駿河の國ゆ。こちんくの國のみ中ゆ。出で立てる富士の高嶺は」

ごちゆうし

骨々し(形。形狀言シク活) 骨がまし。●骨つばい。●無骨な。●無風流な。○土佐「舟君の病者もさよりこちんしき人にてかうやうの(歌よむやうの)事更に知らざりけり」

ごちゆう

後住(名) 寺の先の住職に對して後の住職をいふ稱へ。

ごちゆうのたふ

五重塔(名) 五層に造りたる寺の塔。

ごり

狐狸(名) 狐と狸と。

ごり

行李(名) かうりに同じ。

ごり

垢離(名) 頭から水をあびて身を清むる事。神佛に對してする行ひ。

ごり

凝(名) 凝る事。又は凝りたるもの。

ごり

香。●抹香。

ごりかたまり

凝固(名) 頑固に熱心なる事。

ごりかたまる

凝固(自動四段) 凝りて固くなる。●頑固に熱心する。

ごりやリヨウ

御領(名) 御領分。 (一)神のみたま。(二)崇る神。●疫病神。

ごりやリヨウ

疫病神。

これリヨウ

御料(名) 御料地に同じ。

これリヨウにん

御察人(名) 姫の尊稱。

これリヨウち

御料地(名) 皇室の御所有地。

ごりべリヨウち

御靈會(名) 六月十四日行はる、京都祇園の祭。

ごりたき

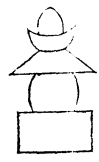
香焼(名) 佛堂の異名。伊勢齋宮の忌詞。

ごりつ

孤立(名) 離れて獨り立つ事。少しも助力者なくして自己一人なる事。●一本立。△(動) 一孤立す。

ごりん

五輪(名) (一)五體に同じ。長阿含經に。二肘二膝頭項謂之五輪とあり。(二)人間の五體に具はり居る五種の原素。すなはち地、水、火、



風、空。(三)五體に象ざりて作れる卒都婆。五つの石を重ねたる石塔。(圖)

ごりん

五倫(名) (一)儒道にていふ五種の親族。君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友。(二)又其間に履行す

べき人道。

古流(名) 藝術の古き流派。

こりりゅう  
こりすま  
こりすまの。――こりすまの。  
凝りもせず。〔副〕こりすまに。○千載  
「錦木の千束に限なかりせば猶こりすまに  
立てましものを(形)こりすまなる。(又)

小糠(名) 糠に同じ。

こぬか  
こぬかあめ  
小糠雨(名) 小糠の如く細く降る雨。●細  
雨。

(名) 木のうれ。●楢。○萬葉「足引の木の木  
ぬれに白雲に立ち棚引くさ」

こぬれ  
こぬまびと  
小盗人(名) 些細なる物を盗む盗人。

凝(自動四段) 「一」集まり固まる。「二」熱心にな  
る。

凝(他動四段) 薪の材料を伐り取る。

こる  
こる  
懲(自動上二段) 一度の経験に辟易して又させぬ  
氣になる。

凝海藻(名) 石花菜の古名。(和名抄)

こるもは  
こなるこなるに  
凝り固まる有様。●ごろくくに  
〔副〕凝り固まる有様。●ごろくくに

○記「こなるくにかきなして引き上げ給  
へる矛の先より滴る潮つもりて島さなる」

こほろぎ  
蟋蟀(名) 虫の名。〔一〕床下などの濕地に  
生じ秋に入りてより冬の始まで鳴くもの。

……古へきりきりすと稱へしは是なり。  
〔二〕古へこほろぎと稱へしは今いふきりき  
りすの事。

(名) 眞黒なる色。○猿源氏册子「こほろぎ  
の盃」富士人穴册子「こほろぎの鬚」

小躍(名) 喜びの餘り踊り上がる事。

こほろぎ  
こほろぎ  
小男(名) 「一」小さき男。●小がらの男。〔二〕  
若年の男。

郡(名) 行政区劃の名。昔は國の小別。今は縣  
の小別。

こほり  
こほりいし  
氷(名) 寒氣に觸れて水の凝り結びたるもの。  
氷石(名) 水晶の異名。

こほり豆腐  
氷豆腐(名) 食品の名。豆腐を氷らせて  
製したるもの。

冰蕎麥(名) 食品の名。蕎麥を氷らせて貯  
へたるもの。

こほりのほし  
氷の橋(名) 氷の張り詰めて其上に往來  
せらるゝを橋に喩へて云ふ。

こほりのなし  
(名) 凍梨の文字の直譯。◎老人の皮膚



の色。○清輔尙齒會序「膚は氷の梨になりてもし」

こほりのせき 氷關(名) 氷の張り詰めて氷の通ひの止るを關に喩へて云ふ。(好忠集)

こほりごんにく 氷蒟蒻(名) 食品の名。蒟蒻を冰らせて製したるもの。

こほりざとう 氷砂糖(名) 砂糖の一種。氷の如く凝結せしめたるもの。

こほりみつ 氷水(名) 夏の飲料。氷を氷に削り込みたるもの。

こほりもち 氷餅(名) 食品の名。餅を冰らせて製したるもの。

こほろび 籠蓋(名) 香を焚く時伏籠の上に蓋ふもの。

こほる 氷涼(自動四段) 液體の寒氣に觸れて固體なるもの。

こおよび 小指(名) こゆびの古名(和名抄)

こおん 吳音(名) 支那の吳地方の古代の音。三韓を経て我國に渡來せしもの。

こなんな 小女(名) 「一」小さき女。●小がらの女。「二」若年の女。

こわらう 牛王(名) 熊野の牛王を見よ。

こなげ 小桶(名) 小さき桶。

こほやし 戀(形。形状言シク活) こほしに同じ。(萬葉)

こおもて 小面(名) 能面の名。若き女の顔。

こほりひ 強飯(名) こほめしに同じ。

こわいろ 聲色(名) 「一」音聲の模様。●物の言ひ振り。「二」役者の聲色を真似る事。

こはばる 強張(自動四段) こほくつつばる。(自動四段) 強くある。●こはる。

こはる 毀(自動下二段) 崩る。●砕くる。●こはがる。(自動四段) こほしと思ふ。●恐怖する。●恐ろしがる。

こわたり 古渡(名) 昔の舶來又は其品。

こわたか 聲高(名) 音聲の高き事。●高聲。△(形) 聲高なる。(又) 聲高の。(副) 聲高に。

こわだえ 聲絶(名) 聲の絶ゆる事。(雅)

こほりれ 毀(名) こほる事。又はこはれたるもの。

こほろぞく 強裝束(名) 鳥羽天皇の御代より始まりたる衣紋の強く固き裝束。

こわづかひ 聲遣(名) 聲の遣ひ方。●物言ひ。●聲音。(雅)

こわづくりひ 咳拂(名) こわづくりに同じ。●咳拂。(雅)

こわつくるぶ (自動四段) こわつくるに同じ。(雅)

こわつくり (聲作(名) 咳拂ひ。(雅))

こわつくる (聲作(自動四段) しはぶく。●咳拂する。(雅))

こわつま (名) こわぶり。●こわつまひ。(雅)

こわね (聲音(名) 物いふ聲。●聲様。●音様。●音聲。(雅))

こばら (本原(名) 立木のある原。

こわく (蠱惑(名) 感はず事。△(動)―蠱惑す。

こわまね (聲真似(名) 他の音聲を似する事。(雅))

こわぶり (聲振(名) こわつまひ。●こわれ。●こわざま(雅))

こば (副) 恐ろしく思ひながら。

こば (強強し(形。形状言シク活) 「一」強く見ゆる。●「二」恐ろしく見ゆる。

こばま (聲様(名) 聲の様子。●聲音。(雅))

こわね (名) こわいるこわれに同じ。(雅)

こわね (小脇(名) 脇に同じ。

こばめし (強飯(名) 白米に糯米を加へ大角豆又は小豆を混へて蒸したる飯。●おこば。●こはいひ。●赤飯。●強飯。

こはし (強。剛(形。形状言ク活) 「一」固し。●つよし。●柔(雅)ならぬ。●頑固である。●「二」恐ろし。

こはりし (強裝束(名) こはさうろくに同じ。

こはす (毀(他動四段) 崩す。●砕く。●破壊する。

こか (胡笳(名) 笛の一種。葦の莖にて造りたるもの。

こか (古歌(名) 古人のよみたる和歌。

こか (古雅(名) 古色を帯びて雅味ある事。

こか (五歌(名) 詩學上韻字の一つ……韻を見よ。

こかい (湖海(名) 湖と海と。

こがひい (子養(名) 幻兒を養ふ事。

こがひい (蠶養(名) 蠶を養ふ事。●養蠶。

こかい (五戒(名) 佛敎にていふ五條の戒め。一に殺生、二に偷盜、三に邪淫、四に妄語、五に飲酒。

こかい (誤解(名) 誤りて解釋する事。●思ひ違ひ。△(動)―誤解す。

こがる (焦(自動下二段) 「一」火にて焼け又は炙られて黒くなる。●「二」心中甚しく苦勞する。●深く懸慕する。

こがる (漕(自動下二段) 舟の浮ぶ。

こがた (小形(名) 小きき形。●小振り。

こがたな (小刀(名) 紙など切るに用ふる小きき刀。

こがね 黄金。金(名)。(一)金屬の名。黄色の光ありて最も貴重なるもの。(二)黄金にて作りたる貨幣。(三)貨幣の總名。●金錢。(四)色の名。きん色。

こがねづくり 黄金作(名) 黄金にて裝飾したる事。又は其太刀。

こがねむし 黄金虫(名) 虫の名。玉虫の種類にて其甲金色に光るもの。

こがねのきし 黄金の岸(名) 極樂世界。……此地には金沙を敷きあるよ！彌陀經に云へり。○夫木「澄みまさる池の心にあらばれて黄金の岸に波よりける」

こがねのみね 黄金峯(名) 大和金峯山の異名。

こがねのせに 金錢(名) 罌麥の異名。○夫木「拂ひあけぬ葎の下に隠せどもこがねのせにの花はかくれず」

こがねぐさ 黄金草(名) 薔の異名。

こがら 小雀(名) 鳥の名。形雀に似て小さく鳴く聲のもの。美しきもの。

こがらめ 小雀女(名) 小雀に同じ。

こがらし 木枯。風(名) 秋の末より冬の初にかけて吹

く風。

こがらす 小鳥(名) 平家傳來の名劍の名。

ごかん 五感(名) 人體の五種の感覺。すなはち視、聽、

嗅、味、觸。

こかく 古格(名) 昔からの定まり。

ごかく 古學(名) (一)我國古代の歴史、律令、歌文等を研究するの學問。●國學。●和學。(二)漢

學にては宋朝に起れる朱子學に對して其以前の學を云ふ。●復古學。

ごかく 五角(名) 双方力量の同一なる事。

ごかく 語格(名) 言葉の規則。●文法。

ごかく 語學(名) 言語の仕用法を研究する學問。

ごかくる 木隱(自動下二段) 木の蔭に隠る。

ごかくれ 木隱(名) 木隱る事。●木の蔭。

こかけ 木蔭(名) 木の蔭。

こがさかけ 小笠懸(名) 笠懸の一種。

こがめ 小瓶(名) 小さな瓶。

こがしの 焦籠(名) 藁火にて焦かし色付けたる矢。

こかも 小鴨(名) 鳥の名。鴨の一種にて小さきもの。

こかせ 小風(名) 少しばかり吹く風。●そよ風。

こかす (他動四段) ころかす。●倒す。

こがす 焦(他動四段) 焦げさせる。●炙りて色を付くる。

こよひ 今宵(名) 今日の夜。●今夕。●今晚。

こより (名) じよりに同じ。

こよなし (形。形状言ク活) 他と比較して遙に優れて居る。●彼よりは格別である。○空穂「女

の中には九にあたり給ふなんいさこよなく物し給ふ」

こよう 小用(名) 「一」些細なる用事。「二」小使。

こよう 御用(名) 「一」用事の敬語。「二」其筋の用事。

●公用。●公務。

ごえふん 五葉(名) 五葉の松の略。

ごえふん(のま) 五葉松(名) 松の一種。葉細く短く五枚づゝ出づるもの。

こやうじ 小楊枝(名) 楊枝の一種。齒の間など掃ふに用ふるもの。●くろもじ。●爪楊子。

ごよぐ 五慾(名) 佛教にいふ五種の情慾。||五塵に同じ。

こよみ 曆(名) 年中の月日、季節、干支、日の吉凶、祭日など書き載せたるもの。

こたひ 固體(名) 物理學上にいふ三體の一つ。固まりて一定の形を成したるもの。●固形體。

こたひ 小鯛(名) 小さき鯛。

こたい 古代(名) 「一」古の世。「二」古代の形式。

こたい 五體(名) 四肢と頭身とを合はせて云ふ。からだ。

こたい 五大(名) 人間の身に具はる五大原素。地、水、火、風、空。(佛教)

こたい 五代(名) 支那にて唐朝の亡びし以後の五時代の稱。すなはち後梁、後唐、後晋、後漢、後周。

こたい 御大禮(名) 徳川時代。將軍宣下の大儀。

こたいそん 五大尊(名) 五大明王に同じ。

こたいこ 小太鼓(名) 大太鼓に對して云ふ。しめだいこ。

こたいみ 五大明王(名) 惡魔を降伏し佛法を守護する五體の明王。おの／＼分業して五方を掌る。東方には降三世明王、南方には軍荼利夜叉明王、西方には大威徳明王、北方には金剛夜叉明王、中央には大聖不動明王。

ごたいし 五代史(名) 五代の歴史。

ごたいしゅう 五大洲(名) 地球上の萬國を五つに分ちたる稱。亞細亞、亞非利加、歐羅巴、亞米利加、埃太刺利亞。

こたに (名) 草の名。鶯の類ならんとの説あれど詳ならず。(源氏。枕)

こたぢ 小太刀(名) 小さき太刀。

こたぢ 木立(名) 木の立ち並びたる事。又は其處。

ごたぢ 御達(名) 女の尊稱。古參の宮仕女。

こたる 木垂(自動四段) 「一」木の枝の垂る。「二」かたむく。働の專になる。(雅)

こたるき 木垂木(名) 枝の垂れたる木。(萬葉)

こたはる 自動四段 拘泥する。引つかゝる。關係する。

こたか 小鷹(名) 小鷹檀紙の略。

こたかがり 小鷹狩(名) 秋の季節にする小鳥を捕るための鷹狩。

こたかたんし 小鷹檀紙(名) 紙の名。檀紙の一種にて大高檀紙より少し小形なるもの。

こたかし 木高(形。形状言ク活) 櫓の高き。○後撰「引き積ふし人ばうべこそ老いにけれ松のこた

こたかし 小高(形。形状言ク活) 少し高し。

こたつ 炬燵(名) 圍爐裏の上に櫓を置きて蒲團を覆ひ身を暖むるもの。

こたつ 禪脫(名) 雅樂の一種。散樂の一名。

ごたつ 誤脫(名) 誤字脫文。

ごたつ 自動四段 ことごとす。

ごたつ 炬燵櫓(名) 炬燵の上に置きて蒲團を支ふるもの。

こたね 子種(名) 動物の種子。

ごだん 後段(名) 後の段。次の幕。

ごだんのみずほひ 五壇の御修法(名) 東、西、南、北、中央の五所に壇を築き五大明王を祭りて執行する祈禱。悪魔降伏病氣平癒などのためにする事。

こたふ 答(自動下二段) 「一」返事する。○返答する。○答辯する。○答禮する。「二」應ずる。○感ずる。○通ずる。「三」響く。

こたくみ 木工(名) こたくみのつかさの略。

こたくみのつかさ 木工寮(名) もくれうに同じ。(和名抄)

こだま

木霊(名) 「一」古木の精霊。……數百年經たる

老木に現れる、といふ其木の精霊。「二」山彦。●反響。

こだごた

(副) 込み合ふ有様。●混雜する有様。

こたへ

答(名) 答ふる事。●いらへ。●返答。●返事。●應答。●答辯。

こたて

小橋(名) 或物を代用して當座の橋を爲す事。○謡曲「折妻戸を小橋に取つて彼小男をれらひけり」

○謡曲「折妻戸を小橋に取つて彼小男をれらひけり」

こたみ

(副) こたみに同じ。●今度。

こたび

此度(副) このたび。●今度。●今般。

これ

是。此之(代) 我身に近くして手に取らるゝ程の物事を指す詞。

これ

(感) 人を呼び掛くる聲。○「のう、これ〜」

これい

古例(名) 昔よりのならび。●古式。

これら

虎列拉(名) 病の名。急劇なる吐瀉を發して最も危険なる傳染病。

これしもの

(副) 此位の。●俗。

こそ

(助動) 願の詞。●て貰ひたい。●て欲しい。○萬葉「吾妹子と見つゝ、忍ばむ沖つ藻の花。きたらば我に告げこそ」同「わが思ふあこ眞

きたらば我に告げこそ」同「わが思ふあこ眞

こそ

(後)

「一」手に取り上げたる物の中より一つ擇び抜く程の力をあらはす詞。その一層強きもの。○古今「色よりも香こそあはれさおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」(二)たゞ口調を強むる爲めに用ふるもあり。○新古今「ほのゝさ春こそ空に來にけらし天のかぐ山霞たなびく」

人を呼ぶ詞。名の下に附けて用ふ。○源氏「右近の君こそ先づ物見給へ」

こそ

(感)

人を呼ぶ詞。名の下に附けて用ふ。○源氏「右近の君こそ先づ物見給へ」

こそ

去年(名) きよねん。●昨年。

こそ

御所(名) こしよに同じ。

こそばゆし

(形。形狀言ク活) こそぐらるゝ時の感じがする。●くすぐつたたい。

こそぞる

擧(自動四段) こそんくく揃ふ。●残らず集むる。●滿つる。○伊勢「舟こがりて泣きにけり」宇治「京中の人こそりて参りけり」

こそぞう

(自動四段) こそ〜する。

こそぞう

小僧(名) 「一」幼年の僧侶。「二」商家に使はるゝ幼年の男兒。●丁稚。

こそぞう

故遣(名) 態を企て、遣る事。

こそぞう

故遣(名) 態を企て、遣る事。

こそぞう

故遣(名) 態を企て、遣る事。

こぞろ

吾曹(代) 我々。●吾輩。●我等。

こぞろ

護送(名) 囚人など護り送ること。△(動)―護送す。

こぞろ

五臟(名) 古代醫學上の詞。腹中にある五種の臟腑。肝、心、脾、肺、腎。

こぞろ

五常樂(名) こじやうらくに同じ。姑息(名) 其時丈の間に合せ。●一時逃れ。

こぞろ

(他動下二段) 籠の先などにて物を掻き取る。●へがし取る。●粉にして取る。○宇治、綱薬にこそけて

こぞろ

(他動四段) 脇の下、腮の下などに手を入れて笑ふやうの感じを起させる。●くすぐる。

こぞろ

去年草(名) 麥の異名。(副) 音立てぬやうに物をする有様。隠れて物をする有様。(又)こそ〜と。

こぞろ

小袖(名) 「一」裝束下に着る袷は大袖なる故それに対して常の衣服をいふ稱。「二」絹にて作れる縮入の衣服。「三」鍔の袖の一種。常

こぞめ

濃染(名) 濃く染むる事。又は濃く染めたるものより小さきもの。(圖)



こぞめ

濃く染むる事。又は濃く染めたるものより小さきもの。(圖)

の。

こぞめつき

木染月(名) 大陰曆九月の異名。

こぞめのうめ

濃染梅(名) 紅梅。

こつ

骨(名)

「一」ほれ。「二」死者の遺骸。「三」恰好。●工合。「四」藝術の秘法。●藝術の妙處。

こつ

木屑(名)

木の屑。●木切れ。(萬葉)

こつ

(他動上二段)

れぢる。

こつ

牛頭(名)

地獄の獄卒。人身にして牛頭なるもの。

こつ

木端(名)

木の削り屑。

こつ

骨脾(名)

かるた。

こつ

骨肉(名)

「一」骨と肉と。「二」血統の親族。

こつ

子霊(名)

子宮。

こつ

骨佛(名)

死人。●屍體。

こつ

骨法(名)

法式。●式禮。

こつ

骨董(名)

古道具。

こつ

(代) こちら。

こなた。

こつ

小槌(名)

小さき槌。

こつ

骨桶(名)

火葬したる骨を入れる桶。

こつ

小柄(名)

小刀の一種。脇差、刀などの鞘に差して持つもの。

こつ

乞丐(名)

乞食。

こつかひい 小使(名) 官廳、會社、學校、病院等の下僕。

こつかひい 小遣(名) 雜費に支拂ふ錢。

こつかに (副) 粉な〜に。●粉の如くに。○謠曲「身

をこつかに碎きてし

こつがら 骨柄(名) 骨組。●體格。●かつふく。

こつかく 骨格(名) 骨の組み立て。

こつたふり 木傳(自動四段) 木より木に傳ひ行く。

こつそり (副) 内證で。●内々。●密に。(又)〜こつそ

りぞ。

こつさう 骨相(名) 骨組の様子。

こつさうがく 骨相學(名) 骨相によりて人の運命性質

等を判斷する學問。

こつづみ 小筒(名) 小鉢。

こつづみ 小鼓(名) 鼓の一種。右の肩に上げて打つも

の。

こつなし 骨無(形。形狀言ク活) こちなしに同じ。(天

鏡)

こつむ (自動四段) 片寄る。

こつむ 小角(名) 角の中にある骨。(和名抄)

こつく 小突(他動四段) 少しづゝ突く。

こつくる 木造(他動四段) 木を代りて材木に作る。○

空穗「桐の木を代り倒して割りこつくるも  
のあり」

こつま 小裒(名) つまに同じ。

こつけ 小附(名) 一駄の荷の上に更に附け加ふる荷。

こつけい 滑稽(名) おどげ。●だうげ。●ふさげ。●じや

うだん。●しゅれ。

こつけいか 滑稽家(名) 巧に滑稽す。人。

こつぶ 小粒(名) 「一」小さき粒。「二」小粒の銀貨。徳

川時代の一朱二失貨幣の稱。

こつこつ (名) 水又は酒を飲むに用ふ硝子製の盃。

こつこつ (副) 固き物の觸れ合ふ音。●ひからびて固

くなれる有様。

こつてんわう 牛頭天王(名) 神の名。「一」天竺にては

祇園精舎の守護神。「二」我國にては素戔嗚

尊。

こつめ 後詰(名) 先手の侯補として後に詰め居る軍

勢。●後陣。●後手。

こつみ 木積(名) 水に浮び集まりたる木切れ。○夫木

「堀江より朝潮みちによるこつみ具にあり

せびつさにまましを」

こつし 兀子(名) 倚子の類。禁中にて官吏の着座する爲



めに設くるもの。

ごしやしょう 業障(名) こふしやうに同じ。(源氏)

ごしき 乞食(名) こじき。●物貰ひ。●袖乞。

ごしきでちやう 乞食調(名) こしきでうの略。

ごせつ 骨節(名) 骨の番目。

ごつぜん 忽然(副) たちまち。●俄に。不意に。(又) 忽然と。

ごつずる 骨髄(名) 「一」骨と髓と。「二」精神。●心底。

こねる 捏(他動下一段) 粉に水を加へて練る。

こな 粉(名) こに同じ。

こな 小名(名) 物事の一部分の名。

こな (名) 兒等の意。◎女。(萬葉)

こなひだ 此間(名) このあひだ。●先日。

こないしよ 御内書(名) 將軍より下さる手紙。……封

を御内書といふ。

こなは (副) 來すに。(萬葉東歌)

こなる (自動下二段) 「一」粉になる。●碎くる。「二」消化する。●柔かになる。●馴れ熟する。

こなほし 小直衣(名) 直衣の一種にして腋を明け袖

括を附けたるもの。

こなから 小半(名) 「一」半分の半分。●四半分。「二」

升の四半分。すなはち一合五勺。

こなた (名) 作りこなしたる田。●(和名抄)

こなた 此方(代) 「一」こちら。●この方。●こっち。「二」

己れ。●自分。●當方。●手前。

こなたぎま 此方様(名) 「一」こちらの方。「二」私方。●

手前。

こなら 小檜(名) 木の名。檜の一種。薪などに適する

もの。

こなう 御醫(名) 貴人の病氣。●御不例。

こなぎ 小水葱(名) 水葱に同じ。(歌詞)

こなみ (名) 先妻。……後妻に對して。(古)

こなす (他動四段) 「一」粉にする。●碎く。●消化さ

する。●柔にする。「二」馴れしむる。「三」

罵言する。●愚弄する。

こら 子等(名) 「一」小兒等。●子供等。「二」男子を親

しみ呼ぶ詞。○新古今「いざや子等香椎の

方に白妙の袖さへねれて朝菜つみてん」

「三」女子を親しみ呼ぶ詞。○萬葉「荒玉の年

の緒長し吾もへる子等に戀ふべき日は近づ

きん

ごらん

御覽(名) 見給ふ事。△(他動)―御覽す。

ごらふり

(他動下二段) 耐へ忍ぶ。●忍耐する。●辛抱する。

ごらしめ

(名) 懲らす事。●懲戒。

ごらす

懲(他動四段) 懲りさす事。

ごらす

凝(他動四段) 凝らしむる。

ごむ

(自動四段) 子を生む。○記「空みつ大和の國に。」

ごむ

雁(こむと聞くや) 雁こむと聞くや

ごむ

込(自動四段) 「一」押されて入る。「二」充滿する。●入り交じる。

ごむ

込(他動下二段) 押し詰むる。●押し入る。

ごん

魂(名) たましひ。

ごん

紺(名) 染色の名。藍の濃くして紫が、りたるもの。

ごん

今(名) いま。●現在。

ごん

婚(名) 婚禮。

ごん

坤(名) 地。……乾に對して。

ごん

獻(名) 杯の數をかぞふる詞。○「一獻」「二獻」「三獻」

ごむ

護謨(名) 英語より來る。◎「一」木の脂より製し

たる粉にして粘着方に富むもの。◎「二」護謨

より製したる固形體にして種々の器物等に

造る極めて彈力に富みたるもの。

かりに其官の事務を行ふ役。●次官。●

副官。……「權大納言」「權中納言」「權頭」

「權守」「權助」「權大夫」の類。

悪意(名) 交情の親密なる事。

婚姻(名) 婚禮。●結婚。

焔爐(名) 火鉢の一種下に風穴を設けて火の起

り易きやうしたるもの。急ぎて物を煮る時

なごに用ふ。

岷嵒(名) 支那にて仙人の住む山。

岷嵒八曲(名) 雅樂の曲名。

軒廊(名) 古へ禁中にて南殿の東廊の名。

金春流(名) 能樂の流派の名。金春家

に相傳するもの。

今晚(名) 今夜。●令宵。

今般(副) 今度。●今度。●今回。

魂魄(名)

今日(名) 今の日。●此日。●本日。

蒟蒻(名) 「一」草の名。其根を蒟蒻玉と稱ふ

るもの。(一)食品の名。蒟蒻玉より製したるもの。

蒟蒻玉(名) 蒟蒻の根にて形馬鈴薯などに似。毛あるもの。製して蒟蒻とす。

こんぼん

根本(名) 大本。●根元。  
混本。(名) 和歌の一體。短歌の一句を省きたるもの。……「朝顔の。夕かけまたす。散りやすき。花の世ぞかし」の類。(童蒙抄)

こんべいたう

金米糖(名) 菓子的一種。小さき粒に尖りたる疣を附けたるもの。

こんべん

言偏(名) 漢字の偏の名。語、訴、證、等の左の部分。

こんざん

餛飩(名) 古代菓子的一種。小麦の粉を丸めて團子の如く作れるもの。

こんぞん

渾沌(副) 天地未だ分れずして一つに丸がり居たる時の有様。●(又)―渾沌と。

こんどう

金銅(名) 金の入りたる銅。  
今朝(名) けさ。●此朝。

こんりょうのぬい

袈裟の御衣(名) 袈裟に同じ。

こんりんぞく

金輪際(名) 大地の底の極所。  
金輪際までも。●こむらうしても。(俗)

こんりょふ

建立(名) 寺、堂、塔などを新に造り建つる事。●造立。△(動)―建立す。

こんるり

紺瑠璃(名) 紺にして瑠璃色を帯びたるもの。

こんわ

懇話(名) 懇切なる談話。●懇談。△(動)―懇話す。

こんか

言下(名) 一言の下。

こんがら

矜羯羅(名) 不動明王の使者。形十五歳の童の如く蓮華の冠を着し、二手合掌して其二大指と頭指との間に横に一股杵を持つるもの。

こむかふり

(自動四段) 向ふに同じ。○萬葉「やすの川こむかひ立ちて年の戀けながき子等が妻問の夜」

問の夜

こんかき

紺掻(名) 染物師。●紺屋。

こんがすり

紺飛白(名) 紺地に飛白ある織物。

こんよ

坤輿(名) 地球。  
來ん世(名) らいせ。●未來の世。●あの世。

こんれい

婚禮(名) 「一」婚姻の禮式。●婚儀。「二」結婚。●縁組。  
虚無僧(名) 普化宗の僧にて尺八を吹きつゝ

を食しあるくもの。●ぼろく。

こんづ

濃漿(名) こみつに同じ。

こむね

小胸(名) 胸に同じ。

こんねん

今年(名) ことし。●此年。●本年。

こんなん

困難(名) 困苦艱難。●困却。●難儀。●難避。

こむら

胼(名) 胼の後の肉の膨れたる處。●ふくらば

こむら

木村(名) 木の枝のさしけいばしたる下陰。●木

こむら

の集まり繁りたる處。

こむらがへり

腓返(名) 腓の筋のつまる事。

こむら

小紫(名) 木の名。葉は櫛に似て小さき紫

こむら

の花咲き紫色の實を結ぶもの。

こむら

濃紫(名) 濃き紫色。

こむら

權北方(名) 權妻の尊稱。(榮花)

こんく

困苦(名) 苦しみ困苦事。●困難。●艱難。●

こんく

辛苦。

こんく

言句(名) 言語と文句と。

こんく

金鼓(名) 佛前にて打ち鳴らす鼓。

こんぐ

欣求(名) 欣び求むる事。(轉教)

こんぐ

混和(名) よく混ぜ合はす事。△(動)混和す。

こんぐい

今回(名) 此度。●今度。●今般。

こんぐい

吼噓(感) 狐の鳴聲。(狂言)

こんぐん

權官(名) 權大納言、權中納言、權助、權頭

こんぐん

等總べて權の字の附く官。

こんぐらべ

根競(名) 根氣を競ぶる事。

こんや

紺屋(名) 染物を染する家。又は其人。●紺

こんや

搥。●染物屋。●紺屋。

こんや

今夜(名) 今日之夜。●今晚。●今宵。

こんげつ

今月(名) 今日之月。●此月。●本月。

こんげん

根元(名) 大本。●根本。●本源。

こんぶ

昆布(名) 海草の名。幅廣くして長一丈餘に及

こんご

ぶもの。世俗祝儀に必ず之を用ふ。

こんご

言語(名) げんごに同じ。

こんごうだん

言語道斷(句) 言語にも盡されぬ程あ

こんご

きれたる事。

こんこん

懇懇(副) 懇なる有様。●懇切に。

こんこん

滾滾(副) 水の流れて盡きぬ有様。

こんこん

金銀(名) きんぎんに同じ。(雅)

こんがう

金剛(名) 「一」金剛界の諸佛の名。「二」草履

こんがう

の異名。

こんがふ

混ぜ合はす事。●混じり合ふ

事。△(動)―混合す。

こんがうりゅう 金剛流(名) 能樂の流派の名 金剛の家に相傳せしもの。

こんがうかい 金剛界(名) 金剛山にある一世界の名。諸佛の住むところ。(佛教)

こんがうづゑ 金剛杖(名) 杖の一種。修験者又は信徒など登山する時に携ふる杖。白木にて八角に作る。

こんがうやし 金剛夜叉(名) 五大明王の一つ。三面六臂にして左手に輪寶を捧げ右手に矢を持ち一切の畏るべき夜叉を降伏せしむるもの。(佛教)

こんがうせん 金剛山(名) 地球の外を圍めるといふ想像の山。(佛教)

こんがうせき 金剛石(名) 礫石の名。水晶に似て極めて堅きもの。

こんゑ 近衛(名) こんゑふの略。

こんゑふ 近衛府(名) このゑふに同じ。

こんでう 健兒(名) 「一」古へ兵部省の管下にて諸國に配置せられたる兵士。「二」武家にては中間の稱。

こんでい 金泥(名) きんでいに同じ。

こんでいろう 健兒所(名) 中間部屋。權妻(名) 妾の異名。

こんざい 根氣(名) 忍耐して事に當たる氣力。●精。●根。●精氣。

こむぎ 小麦(名) 麥の一種。製して饅頭粉とし。又は醬油を造るに用ふるもの。

こんぎ 坤儀(名) 地球

こんぎ 婚儀(名) 婚姻の儀式。●婚禮。

こんげきょう 權教(名) 方便を假りてする教法。(佛教)

こんぎやきょう 勤行(名) 勤め行ふ事。●誦經念佛等のつこめ。(佛教)

こんぎやく 困却(名) 困る事。●困難。△(動)―困却す。

こんゆふ 今夕(名) 今日の方。

こんし 紺紙(名) 紺色に染めたる紙。金泥にて經文を書くに用ふるもの。

こんしてう 金翅鳥(名) 佛教上想像の鳥の名。金色の翼を持ちて毎日一龍王と五百の小龍を食ふさいふ鳥。

こんせじゅう 今宵(名) 今夜。

こんじゅう 紺青(名) 繪具の名。群青に似て濃く極

めて高直なるもの。

こんじヤシヨウ 今生(名) 人の生きて居る間。●此世。

●現世。

こんじヤシヨウ 言上(名) 申し上ぐる事。●上申。△(動) 一言上す。

こんじツ 今日(名) こんにちに同じ。

こんじツ 權實(名) 權教と實教と。(佛教)

こんじん 金神(名) 陰陽家にていふ神の名。此神の居る方角に當たりて家の建築などすれば忽ち崇るこいふもの。

こんじき 金色(名) 黄金の色。

こんじ 胡飲酒(名) 雅樂の曲名。

こんびら 金毘羅(名) 〔一〕天竺にては靈鷲山の守護神。〔二〕我國にては大國主神。本社は讚州那珂郡象頭山にあり。維新後は琴平神社と稱せらる。

こんまろう 懇望(名) 懇に望む事。●切望。●熱望。

△(動) 懇望す。

こんせき 今夕(名) 〔一〕今日の夕方。〔二〕今夜。

こむすめ 小娘(名) 十三四歳の女子。●少女。●處女。

こむすび 小結(名) 相撲の格式の一つ。關脇に次ぐ。

の。

こう 候(名) 〔一〕大名。〔二〕爵位の名。公爵に次ぎて第二に位するもの。

時節。●氣候。

こう 工(名)

〔一〕手わざ。●手仕事。〔二〕土木。●建築。〔三〕すべて工を業とする人。●職工。●職人。●大工。

こう 功(名)

いさを。●てがら。

こう 項(名)

箇條。●條件。○「憲法第六十四條第二項」

貢物。

こう 貢(名)

くれなぬ。

こう 紅(名)

〔一〕太政大臣、左右大臣、内大臣の官にある人を呼ぶ尊稱。〔二〕轉じて人の尊稱。○「景山公」「春嶽公」〔三〕爵位の名。第一に位するもの。〔四〕おほやけ。

こう 公(名)

〔一〕人數を數ふる詞。〔二〕太刀などの如く總べて口ある物を數ふる詞。

こう 口(名)

鳥の名。白鳥に同じ。●くまび。

こふつ 鵜(名)

鳥の名。鵜の種類。●こぶづる。

こふり 國府(名)

〔一〕中古一國の政務を執りたる官廳。

現今の縣廳の如きもの。(二)國府の置かれたる土地。

こふッ 劫(名) 園碁の詞。一個の石を交互に取り合ふ事。劫(名) 無究無限の長年月。……人壽八萬四千歳の時百年を曆過して壽一歳を減す。此くの如く減じて人壽十歳に至りて止む。また百年を過ぎて一歳を増す。此くの如く増して八萬四千歳に至る。此一増一減を名づけて一小劫と爲す。此くの如く二十増減するを名づけて一中劫と爲す。總べて成、住、壞、空の四中劫を名づけて一大劫と爲す。(佛教)

こふッ 請。乞(他動四段) 願ひ求むる。●請求する。●請願する。

こふッ 戀(他動上一段) 戀しく思ふ。●戀慕する。効(名) するし。●功能。●効驗。

かウ 幸(名) 幸福。●仕合。更(名) 一夜を五分したる稱。初更、二更、三更、四更、五更。

かウ 孝(名) 誠意を以て父母に仕ふる事。●孝行。行(名) (一)行く事。(二)旅行の一組。

かウ 稿(名) 草稿。●下書。香(名) (一)にはひ。●かなり。(二)香料。●薰物。(三)香の道。(四)色の名。……香色を見よ。

かふッ 甲(名) (一)十千の一。きのえ。(二)介殼動物の外皮。(三)武具の名。鎧。(四)手足の背部。(五)琵琶三味線などの胴。

かウ 綱(名) 物の大別。……之に對して其細別を目といふ。

かウ 講(名) (一)經文を講する事。(二)經文を講讀するより起りて◎佛事。●法事。○涅槃講「菩提講」「阿彌陀講」「普賢講」「報恩講」「舍利講」「御命講」「往生講」「八講」「千日講」「五時講」「三」神佛を信仰する人の組合。○富士講「成田講」「一心講」「四」總べて組合又は集會。○無盡講「富講」「謠講」

かウ 頭(督。守)(名) みの音便。

かウ (感) 烏の鳴く聲。(枕) 五兩(名) 五兩十風を見よ。

こふッ 劫(名) こふに同じ。

こふッ 業(名) (一)善果および惡果を受くべき善因又は

がう 郷(名)

がう 號(名)

がぶつ 合(名)

かうい 更衣(名)

かうわ 高位(名)

かうろ 行爲(名)

かういん 拘引(名)

こうじん 後胤(名)

こういん 業因(名)

悪因となるの所業。〔二〕特には前世又は此世にて行ふ罪業。●惡業。……(佛敎)

〔一〕名。●稱。〔二〕風流に附けたる名稱。●雅名。〔三〕順序を數ふる詞。一番に同じ。○「三十號」「五號活字」

〔一〕樹にて量る一升の十分の一。〔二〕平方敷を測る一坪の十分の一。〔三〕山きた舟の帆など最極を十とし最下を一として一合二合三合など數ふる詞。〔四〕箱の類を數ふるにいふ詞。○「辛櫃一合」

〔一〕ころもがへ。〔二〕女官の名。〔三〕女御の次に位して天皇に侍する人。

位の高き事。●高き位。所爲。●所業。●行ひ。

色の名。赤黒くして黄を帯びたる色。

嫌疑などありて其筋へ召連れ行く事。●引致。△(動)―拘引す。

子孫。●血筋。●後裔。善因又は惡因となる所業。(佛敎)

がういん 強姦(名)

かうろ 香爐(名)

こうじん 公論(名)

こういん 口論(名)

かうらう 杭論(名)

かうらう 功勞(名)

かうらう 高樞(名)

かうらう 後涼殿(名)

かうらう 高祿(名)

かうらう 鴻臚館(名)

かうらう 紅波(名)

強姦。△(動)―強姦す。

火を入れて香を焚く器。●火取。公論(名) 〔一〕世間多數の人の賛成する議論。●輿論。〔二〕公平なる議論。

口にてする議論。●言ひ合ひ。●口喧嘩。

杭論(名) 抵抗して議論する事。△(動)―抵抗す。

骨折り。功勞(名) 二階三階の建物。

後涼殿(名) こうりきうでんに同じ。(源氏)

高き秩祿。●大祿。鴻臚館(名) 支蕃寮に屬して古へ來朝の外國人を宿泊せしめたる官の建物。

紅の波。血の形容。紅波(名) 興る事と廢る事と。●盛衰。

興る事と背く事と。向背(名) 抵當品等裁判所の命令によりて競賣にする事。

公賣(名) 物の傾斜の度。其急なるをばやし

勾配(名)



こゝは

こいひ急ならぬをおそしといふ。

紅梅(名) 「一」木の名。梅の一種にして花の

紅なるもの。「二」色の名。紅梅の花の如き色。●桃色の濃きもの。「三」緑色の名。縦糸を紫に横糸を紅にして織りたるもの。

〔四〕衣の重の名。表紅、裏紫。

かこうはな

香華(名) 佛に向くる香と華と。●香華。佛に手向くる香と華と。●香華。

ごふんばら

業腹(名) 憤怒の情に堪へ難き心。

こゝはん

公判(名) 法律上の詞。豫審終はりて後公衆を傍聴せしめてする裁判。

かこうはん

交番(名) 「一」物事を、はりんとにする事。「二」交番所の略。

がごふんほん

合判(名) 武家の役名。連判に同じ。交番所(名) 巡查などの交代出張して人民を保護する役所。

こゝはく

紅白(名) 紅色と白色と。

かこうはこ

香箱(名) 香を入るゝ箱。●香合。香箸(名) 香を挟む箸。

かこうはし

芳。馨。香(形) よき香のする。

かこうにん

降人(名) 降参人。

こゝほ

候補(名) 其職に就かん希望する事。又は其

かこうほ

行歩(名) 歩行に同じ。人。

かこうほり

(名) うもりに同じ。

かこうほね

河骨(名) 草の名。葉は里芋に似て小さく。夏の頃黄なる五瓣の花咲くもの。

かこうほん

稿本(名) 草稿の本。

かこうぼん

香盆(名) 香を載する盆。

こゝほふ

公法(名) 世間一般の法則。●萬國一般の法則。

ごふんばう

業報(名) 善業悪業に對する善惡の果報。〔佛教〕

がごうはほう

號砲(名) 合圖の大砲。

こゝほせい

候補生(名) 候補者たる生徒。

かこうべ

頭。首(名) かしら。●くび。●あたま。神戸(名) 神領の民戸。●かんべ。

こゝへい

工兵(名) 現今の制。架橋、電信、鐵道等を用る兵隊。

こゝへい

公平(名) 偏頗なく平等なる事。

がごうへい

降兵(名) 降参の兵隊。

かこうべなむぐらうた

(名) 旋頭歌に同じ。(躬恒集)

こゝへん

公邊(名) 公儀。

こうへん

後編(名)

書物の前編に對していふ詞。後の

卷。

かうべん

抗辨(名)

抵抗辨論する事。△(動)―抗辨す。

こうとう

口頭(名)

口上。

こうどう

公禱(名)

公衆の席にて公衆と共に祈禱

(基督教)

こうたう

勾當(名)

〔一〕女官にては掌侍の頭。之を勾

頭内侍と稱ふ。〔二〕攝關の家にては會計官。

かうどう

高等(名)

〔一〕高き程度。●高級。〔二〕上品。

△(形)―高等なる。(副)―高等に。

かうどう

鴨頭(名)

食品の名。青き柚を小さく割り

て薬味に入る。時の稱。

こうたう

公道(名)

世間普通の道理。

かうたう

講堂(名)

〔一〕寺の建物の名。七堂伽藍の

一にて講義説法などするところ。〔二〕學校

かうたう

香道(名)

香を懸ぐ術。又之に關するすべ

ての作法。

かうたう

孝道(名)

孝の道。

こうとう

叩頭(名)

頭を地に附けて禮する事。△(動)

―叩頭す。

かうとう

寇頭(名)

書物の頭書。

かうたう

強盜(名)

人の家に押し入る盜賊。

かうたふゆうたい

高踏勇退(句)

官を辞して民間

こうどく

購讀(名)

書物雜誌新聞など購求して讀む

事。△(動)―購讀す。

かうち

河内(名)

河より内部の土地。(萬葉)

かうち

耕地(名)

耕作すべき地。●田地。●田畑。

かうち

交趾(名)

交趾國(今の安南)名産の陶器。又之

に模造せしもの。

こうぢ

小路(名)

狭き道。●大路より大路へ横切りて

抜くる通路。

かうち

麴(名)

米麥を蒸して醱を生ぜしめたるもの。

酒、醬油、味噌など製する原料。

かうちばな

碁釘(名)

碁碁に巧なる人。又之を業とする人。

かうち

麴花(名)

麴の醜。

かうち

工女(名)

工場にて仕事する女。

かうち

孝女(名)

孝行なる女。

かうち

綱丁(名)

貢物を運送する人夫の頭。

かうち

工場(名)

仕事場。

かこうぢヤゴロウ 定考(名) 古へ六位以上の官史の藝能

行狀を考へ定めて撰ぶべきは撰び進むる事。……定考と文字には書きて讀む時は逆にかうぢやうと讀むを習さす。

かこうぢん 紅塵(名) 市中に起る塵埃。

紅茶(名) 茶の一種。紅色の汁の出づる様製したるもの。

かこうぢき 小袴(名) 古代婦人の服。小袖の如く満袖にて裏あり。地は綾にて色は時節によりさまなくあり。裳、唐衣など着ざる時は之を上に打ち掛けにして着るもの。

高直(名) 價の高き事。●高價。

かこうぢちウ 行厨(名) 辨當。●判子。

かこうぢちウ 講中(名) 神佛の信徒の連中。

かこうぢウ 小賣(名) 商業上の謂。消費者に向ひて少しづつ賣る事。

かこうぢ 行李(名) 旅行用の荷物を入るる器。

高利(名) 高き利息。

かこうぢがし 高利貸(名) 高利を取る金貸。

行旅(名) 「一」旅行。「二」旅人。

かこうれコウ 香料(名) 「一」香氣の高き物品。●薰物

こころコウ 後涼殿(名) 禁中殿舎の名。清凉殿の西にあり。

かごふりコウ 合力(名) 「一」力を合はす事。●助力。●救助。「二」合力を乞ふ事。●無心ないふ事。

こころコウ 公立(名) 府、縣、郡、町、村等の公共の設立。

かごうりん 牽釐(名) 物事の極めて些細なる事。

かごうりん 降臨(名) 「一」天孫の高天原より降りて此國土に來り給ふ事。「二」神の天より降りて此國土に來り給ふ事。○謡曲「伊勢大神宮降臨よりこのつた」

かごうりんせつ 降臨節(名) 降誕節に同じ。(基督教)

かごうりき 強力(名) 「一」方の飽くまで強き事。「二」登山者の荷を擔ひ案内をなす人夫。

こころコウ 拘留(名) 警察署などに留め置く事。△(動)→拘留す。

かこうぬし 神主(名) かんぬしに同じ。(雅)

かこうるゐ 柑類(名) 柑子の類。●密柑、九年母、橙などの總名。

かこうた 好悪(名) 好む事と惡む事と。●愛憎。

かぶつおつ

甲乙(名) 「一」甲の人と乙の人と。●誰彼。

「二」優秀。

こうおん

鴻恩(名) 大なる恩。●大恩。

こうおん

厚恩(名) 厚き恩。

がうおく

剛臆(名) 剛毅なる心臆病なる事。

かこうわ

媾和(名) 國と國と和睦する事。●和親。△(動)

一媾和す。

かこうわか

幸若(名) 幸若能の略。

かこうわかのう

幸若能(名) 足利以來行はれたる一種の歌舞。能樂に似たるもの。桃井幸若丸と

いふ人に起りて其子孫代々幸若八郎幸若九郎など名乗り居たり。

耶など名乗り居たり。

かこうわかのまひ

幸若舞(名) 幸若能に同じ。

かこうわし

媾和使(名) 媾和の爲の使者。

こうか

後架(名) 便所。

かこうか

高價(名) 高き價。●高直。

かこうか

(名) 木の名。合歡木に同じ。(六帖)

がうか

豪家(名) 富豪の家。●大盡。

かこうかい

航海(名) 船にて海を渡る事。△(動)一航海す。

かこうがい

筭(名) 「一」髪を掻き上ぐる具。「二」婦人髪

かこうがい

飾の具。髻に横に貫くもの。「三」武士の刀の鞘に差して携ふるもの。

懐慨(名) 國の爲め世の爲め道の爲めなどに憂ひ慨く事。△(動)一懐慨す。(形)一懐慨なる。

かこうがいのはい

沈瀝盃(名) 仙家にて用ふる盃の名。◎沈瀝は海氣なりと云ふ。

こうがん

鴻雁(名) 鳥の名。雁に同じ。

こうがん

紅顔(名) 紅色を帯びて美しき少年の顔。

かこうがん

向顔(名) 對面。(語曲)

がうかん

強姦(名) 強ひて婦女を犯す事。●強姦。

かこうがふ

考(他動下二段) かんがふに同じ。(雅)

こうがく

工學(名) 學科の名。工藝に關する學問の總稱。

こうがく

後學(名) 後進の學生。先輩に對し自ら謙遜して言ふ。

かこうがく

講學(名) 學問を講究する事。

かこうがく

首懸(名) 馬具の名。頭に掛くる革。

かこうがく

考(名) かんがへに同じ。

かこうがく

紺緞(名) こんかきに同じ。

かこうがく

紙捻(名) 紙を細く裁ちて捻りたるもの。●

かこうがく

紙を細く裁ちて捻りたるもの。●

かこうがく

紙を細く裁ちて捻りたるもの。●

かこうがく

紙を細く裁ちて捻りたるもの。●

かこうがく

紙を細く裁ちて捻りたるもの。●

こより。●觀世塵。

こうとろう 公用(名) 公の用務。●公事。●公務。

こうりょう 功用(名) 〔一〕効能と用途と。〔二〕効能。

かこうやう 孝養(名) 孝を盡して養ふ事。

かこうやう 斯く様の音便。◎かやう。●このやう。●此くの如く。○土佐「かうやうの事

歌好むとてあるにしもあらざるべし」

こうそふ 紅葉(名) 〔一〕木の葉の赤くなる事。△

(動)―紅葉す。〔二〕紅葉したる楓。

がうよく 強慾(名) 慾の深き事。△(形)―強慾なる。

(副)―強慾に。

こうた 小唄(名) 短篇の俗曲。

こうたひ 小謡(名) 酒席などにて歌ふ謡曲の中の短き一段。

かうたい 交代(名) 代り合ふ事。△(動)―交代す。

こうたい 後代(名) 後々の時代。●後世。

かうたい 高大(名) 高く大なる事。△(形)―高大なる。

(副)―高大に。

かうたいよりあひ 交代寄合(名) 徳川時代の制。領

地に住して參勤交代する旗本の家柄。

かうだち 神館(名) しみだちに同じ。

かふつだか 甲高(名) 足の甲の高き事。

かうだたみ 香疊(名) 香の道具を包む疊紙。

こうたつ 口達(名) 口上にての達し。●言渡。

かこうたん 高談(名) 高聲に談話する事。

かこうたん 降壇(名) 壇を下る事。△(動)―降壇す。

がこうたん 降誕(名) 〔一〕降生。〔二〕誕生。

がこうたん 豪膽(名) 大膽。

かこうたんし 好男子(名) 〔一〕男らしき男。〔二〕美男子。

がこうたんせつ 降誕節(名) 基督の降誕を祝ふ祭日。●

くりすます。

かうたけ 革茸(名) 菌の一種。赤黒くして食用となる

もの。

かこうれい 伉儷(名) 夫婦の中。●連合。

がこうれい 恒例(名) 常例に同じ。

がこうれい 號令(名) 高聲にて言ひ渡す命令。△(動)―

號令す。

かこうそ 高祖(名) 〔一〕祖父母の祖父母。〔二〕先祖。〔三〕

宗祖。●開山。

かこうそ 楮(名) 木の名。●うちに同じ。皮を剥きて紙

に製するもの。

かこうぞり 髮剃(名) 佛門に入る人の髪を剃る事。

かこうそろう

高僧(名) 德行の高き僧。●位の高き僧。

かこうせつろう

高燥(名) 土地の高くして燥きたる事。△(形)―高燥なる。

かこうぞう

構造(名) 構へ造る事。●造り方。●組立。△(動)―構造す。

かこうぞく

豪族(名) 豪家の一族。

かこうぞめ

香染(名) 香色に染むる事。又は其染めたるもの。

かこうづつみ

香包(名) 香の包み紙。

かこうつう

交通(名) 互に往來する事。△(動)―交通す。

かこうづくゑ

香机(名) 香爐を載する机。

かこうな

寄生虫(名) 虫の名。やごかり。

かこうなき

巫(名) っんなきに同じ。(雅)

かこうら

名) 甲に同じ。龜などの香にあるもの。

かこうらく

後來(名) 今より後。●將來。●爾後。

かこうらつ

高麗(名) 陶器の一種。昔朝鮮より渡りたるもの。

かこうらくべり

高麗練(名) 疊の縁の一種。白き練に雲形などの模様を黒く織り出だしたるもの。又白き麻に紺又は黒にて丸に十の字などの小模様を處々に染めたるもの。現今は多く

かこうらいぢわん

神社、佛閣、床の間などに用ふ。

かこうらいぢわん

高麗茶碗(名) 陶器の名。古代朝鮮産の茶碗。

かこうらいぢうびす

高麗鶯(名) 鳥の名。鶯の一種。又朝鮮鶯ともいふ。

かこうらいやま

高麗焼(名) 朝鮮産の陶器。●高麗手。

かこうらいで

高麗手(名) 高麗焼に同じ。

かこうらいしば

高麗芝(名) 草の名。芝の一種。葉莖共に細くして美しきもの

かこうらいせきし

一種。葉細く美しきもの。

かこうらん

勾欄(名) 欄干の折れ曲がりて作られたるもの。

かこうらん

高欄(名) 欄干。

かこうらく

(名) 戀ふる事。●戀ふる心。●戀。○躬恒集「濶江におふる玉藻のみがくれて我こふらくを知る人ぞなき」

かこうらく

行樂(名) 遊出。

かこうむ

公務(名) 公の用務。●公用。●公事。

かこうん

孤雲(名) 一村離れたる雲。

かこうぶより

(名) 〔一〕冠。〔二〕元服。〔三〕位階。

かろうぶる

(他動四段) 頭に載する。●かぶる。●戴く。●一身に受くる。

かろうん

幸運(名) 幸福なる運命。●仕合。

かろうん

耕耘(名) 耕し耘る事。●耕作。△(動)―耕耘す。

かろうどの

(名) 頭、督、守などの官の人の尊稱。香圖(名) 源氏香の各種に配當したる符號の名。……世俗源氏物語の毎卷の符號の如く思へるは誤なり。下圖には其内の二種を示すのみ。(圖)

かろうのつ

豪農(名) 農を業とする豪家。●百姓大盡。●大農。

かろうのう

功能(名) きいめ。●しるし。

かろうのこし

香輿(名) 香爐を載せたる輿。葬送の行列に用ふるもの。(祭花)

かろうのきみ

(名) 頭、督、守などの官の人の尊稱。香物(名) 食品の名。野菜を糠と鹽とに漬けたる物。

かろうのもの

剛者(名) 剛勇なる人。●つよもの。香具(名) (一)香道に用ふる器具。(二)香に造

かろうぐ

かろうぐ

かろうぐわ

る材料。御羅、沈香の類。業火(名) 噴吐の烈しきを火に喩へて云ふ。(佛教)

かろうぐわ

公會(名) 公衆の人の集會。後悔(名) 先非を悔ゆる事。△(動)―後悔す。

かろうぐわ

口外(名) 口より外に出す事。●人に語る事。△(動)―口外す。

かろうぐわ

郊外(名) 家に遠き田園。●野外。號外(名) (一)定りたる番號の外。(二)新聞雜誌などの順次の號數の外に臨時に發行する印刷物。

かろうぐわ

狡猾(名) わるがしき事。△(形)―狡猾なる。

かろうぐわ

高官(名) (一)高等なる官職。(二)高官の人。

かろうぐわ

交換(名) 互に相換ふる事。●取換。●引換。△(動)―交換す。

かろうぐわ

罌丸(名) きんたま。合卷(名) (一)二冊以上一つに綴じたる書物。(二)草双紙の一名。

かろうぐわ

行軍(名) 軍隊の旅。

かろうぐわ

かろうぐわ

かこうし 香具師(名) 香具を作り又け賣る人。

かこうや 紺屋(名) こんやに同じ。

かこうや (名) 廁に同じ。

かこうとうふ 高野豆腐(名) 氷豆腐の一種。紀州高野山より産するもの。

かこうやがみ 紙屋紙(名) かみやがみに同じ。

かこうやく 膏藥(名) 外用藥の一種。膏にて練りたるもの。●油藥。

がふやく 合藥(名) 調合したる火藥。

がうま 降魔(名) 惡魔を降服する事。

かこうまわり 講參(名) 講中にての參詣。

かこうまん 高慢(名) 人に對して傲り高ぶる事。●傲慢。

がうまん 傲慢(名) 高慢にして無禮なる事。

かこうやまき 高野槇(名) 木の名。槇の一種。葉細くして長く庭木として珍重するもの。

かこうけ 高家(名) 〔一〕豪家。●大家。〔二〕徳川時代。京都と江戸との間に周旋する職の家柄。

かこうげ 高下(名) 高くなる事と下る事と。●高低。●昇降。△(動)―高下す。

かこうげ 香華(名) 佛に供ふる香と花と。

がうけ 豪家(名) 〔一〕權勢威力ある家又は人。●權門。

かこうけん 〔二〕權柄を笠に着る事。●威光を借りて頼みに思ふ事。○源氏「大將殿をぞかうげに

は思ひ聞ゆらん」

かこうけん 公卿(名) くぎやうに同じ。●公家。

かこうけん 紅圍(名) 美しく裝ひたる圍。……美人の圍などに云ふ。

がふけい 合計(名) 合はせて計算する事。又合計したる高。

かこうち 絞纈(名) 古代染模様の名。絞染の類。(和名抄)

かこうけつ 高潔(名) 心の清く潔よき事。

かこうけつ 絞纈(名) けつに同じ。

かこうけつ 豪傑(名) 多數の中にすぐる事。又は其人。

かこうけん 英傑。●俊傑。●英雄。●偉丈夫。

かこうけん 後見(名) うしろみ。●介添。●世話焼き。

かこうけん △(動)―後見す。

かこうけん 貢獻(名) 貢物を獻上する事。△(動)―貢獻す。

かこうけん 高原(名) 地理學上の詞。高地の平原。

かこうけん 効驗(名) しろし。●きいめ。



かこうげん 郊原(名) 野原。

かこうげん 高言(名) 高慢なる言葉。●大言。

かこうげん 巧言(名) 他の氣に入る様に言ふ言葉。●御世辭。

こうげき 攻撃(名) 攻め撃つ事。△(動)―攻撃す。

こうぶ 公武(名) 公家と武家と。●朝廷と將軍家と。

がうふ 豪富(名) 大に富む事。又は其人。

かこうぶつ 好物(名) 嗜むところの食物。

こうふん 紅粉(名) 紅と白粉と。

かこうふん 口吻(名) 口の先。●口振り。

かこうぶん 告文(名) 天皇より神に告げ給ふ御文。

かこうぶんぼく 好文木(名) 梅の異名。

こうふんぼく 興奮劑(名) 腦を刺撃して精神を興奮させる料の藥劑。

かこうふく 幸福(名) さいはひ。●仕合。

かこうふく 降服(名) 降参服従する事。●歸服。△(動)

かこうふく 降服す。

かこうふく 剛愎(名) 意地わろく強情なる事。△(形)―剛愎なる。(副)―剛愎に。

がうぶく 降服(名) 神佛の力にて鬼神惡魔など降服させる事。

がうぶく (一)かうぶくに同じ。(二)特には

かこうぶくろ 香囊(名) 香を入れる囊。

かこうぶし 香附子(名) 草の名。田畑などに蔓延して作物を害するもの。根は薬に用ふ。

こうぶしやしょう 工部省(名) 維新後設置せられ明治十八年に廢せられたる省の名。工事に關する事務を管掌する役所。

こうこ 江湖(名) 世間。●社會。

かこうこ 好古(名) 古を好む事。

かこうこ 香奩(名) 香を入れる、奩。

かこうこ 向後(名) 以後。●今後。

こうこう (感) 狐の鳴く聲。(盛衰)

かこうかう 孝行(名) 孝なる行。

かこうかう 航行(名) 航海に同じ。

かこうかう 香香(名) 香の物に同じ。(俗)

かこうかう (副) 斯く斯く。

かこうかう 香合(名) 薫物を入れる器。

かこうかう 交合(名) 男女の交はり。●交接。△(動)

かこうかう 一交合す。

がうがう 嗷々(名) 口や、ましき事。●かまびすき事。○盛衰事に觸れて嗷々の體。

がうがう 暮々(副) がや／＼かまびすしき有様。

かこうかぼう

神々(副) ちうがうしく同じ。

かこうがやし

神々(形) 形状言シク活) 神聖にして犯し難き心地のせらるゝ有様。●神様らし。

かこうご

公告(名) 世上一般に告げ知らする事。●廣告。△(動)―廣告す。

かこうごく

號哭(名) 聲を立てて泣く事。●號泣。△(動)―號哭す。

かこうごじ

高巾子(名) 殊に高く作れる冠の巾子。白き絹にて包み六位の藏人の着するもの。

かこうえい

後裔(名) 後胤。同じ。

かこうえつ

校閱(名) 文章など調査検閲する事。△(動)―校閱す。

かこうあん

公園(名) 人民公共の遊歩場と定めたる庭園。

かこうあん

後園(名) 家の後にある園。

かこうせん

講筵(名) 講義の席。

かこうえき

交易(名) 物品を交換して相利する事。●貿易。△(動)―交易す。

かこうで

(副) かくての音便。◎かくして。●かくありて。●かくのみにて。○枕「かうでやまんやほさて」

かこうてい

高低(名) たかひく。●高下。

かこうてい

高弟(名) 門弟中の顔立ちたる人。

かこうてい

孝悌(名) 父母に孝に兄弟に悌なる事。

かこうてい

考定(名) 考へ定むる事。

かこうてい

校訂(名) 校合訂正する事。●校止。△(動)―校訂す。

かこうてい

行程(名) みちのり。

かこうてい

拘泥(名) 拘はり泥む事。△(動)―拘泥す。

かこうてつ

鋼鐵(名) 金屬の名。はがね。

かこうてつ

更迭(名) 役人などの代はり合ふ事。●交代。高點(名) 高き點數。

かこうてん

功田(名) 古へ國家に功勞ある臣下に賜はりたる田地。大功、上功、中功、下功の四等ありて大功は世々絶えず上功は三世に傳へ中功は二世に傳へ下功は子に傳へしむ。

かこうでん

功徳(名) 香奠(名) 香の代として死人の靈前に供ふる金鏡。●香料。

かこうでん

合天井(名) 椀子目に造りたる天井。

かこうてんじやう

井。今は寺院宮殿など古風の建物に用ひらる。

かこうあはせ

香合(名) 遊戯の名。種々の香を懸き分

けて優秀を定むるもの。

かこうあん

考案(名) かんがへ。

かこうざ

高座(名) 説教講義其外多数の人に話説する時

登り一段高き座席。●演壇。

こうざい

公債(名) 〔一〕一國或は一府、縣、市等の公共

に對する借入金。〔二〕公債證書の略。

こうさい

後妻(名) 後添の妻。

こうさい

公裁(名) 公邊の裁斷。●裁判。

かうさく

交際(名) 人と交はる事。●つきあひ。△(動)

―交際す。

かうざく

絞罪(名) 現今の制にて死刑の一つ。繩にて

頸を絞て殺す事。

かうざい

交際家(名) 交際の上手なる人。

こうしん

公債證書(名) 公債の債權者たるの

證書。

かうざい

高札(名) 〔一〕たかふだ。●揭示札。〔二〕入

札にて最高額の札。

かうざい

高察(名) 手紙の詞。推察の敬語。●御推察。

かうざい

降参(名) 戦争に敗北して敵に降る事。●降

服。△(動)―降参す。

かうざい

高山(名) 高き山。

かこうざい

郷侍(名) 郷士に同じ。

かこうざい

耕作(名) 田地を耕し作物を作る事。●耕耘。

かこうざい

△(動)―耕作す。

かこうざい

講釋(名) かうしやくに同じ。(雅)

かこうざい

視告朔(名) 古へ百官の出仕せし日を記して

毎月天覽に備へたる一つの公事。……視の

字は讀まぬを習さす。

かこうざい

(名) 秀逸。●上出来。●立派。●警策に同

じ。△(形)―かうざくなる。(副)―かうざ

くに。(雅)

かこうざい

(名) かやうの有様。●斯ういふ有様。

かこうざい

後記(名) 後世まで残る記録。

かこうざい

口氣(名) 口振。●物言ひ。

かこうざい

高貴(名) 高く貴き身分。

かこうざい

香氣(名) かをり。●にはひ。

かこうざい

公儀(名) 徳川時代將軍家の稱へ。

かこうざい

公議(名) 世間多数の人の賛成する議論。●與

かこうざい

講義(名) 其學科又は書物に就きて義理を講ず

る事。△(動)―講義す。

かこうざい

交誼(名) 交友としての信誼。

がうき 降旗(名) 降参の印の旗。

がうき 豪傑(名) 豪傑の意氣。

がうき 剛毅(名) 心のつよく猛き事。△(形)―剛毅なる。(副)―剛毅に。

かこうき 髮際(名) 額の髪が生え際。(雅)

かこうき 考據(名) 考とする據り所。

かこうき 薨去(名) 三位以上の人の死去。

かこうき 薨御(名) 親王、女院、攝關、大臣の御死去。

かこうき 口供(名) 刑事裁判の詞。口上の通を筆記して出たす文書。

かこうき 興行(名) 芝居相撲見世物など演奏執行する事。△(動)―興行す。

かこうき 工業(名) 工事に關する事業。

かこうき 功業(名) 功名手柄。

かこうき 豪俠(名) 豪氣にして俠氣ある事。

かこうき 高金(名) 大金。

かこうき 合盃(名) 婚姻の禮式。

かこうき 購求(名) 購ひ求むる事。●買ひ入るゝ事。

かこうき △(動)―購求す。

かこうき 講究(名) 其事柄を講じ究むる事。●研究 △(動)―講究す。

がうき 號泣(名) 大聲を揚げて泣く事。△(動) 號泣す。

かこうゆ 香油(名) 化粧品の名。香氣のよき油。

かこうゆ 膏腴(名) 地味の肥ゆる事。

かこうゆ 交友(名) 友達。

がうゆう 剛勇(名) たたくつよき事。△(形)―剛勇なる。(副)―剛勇に。

がういう 遨遊(名) 大盡遊び。△(動)―遨遊す。

がういめ 小梅(名) 「一」梅の一種にて其實極めて小粒なるもの。「二」庭梅の一名。

かこういめ 功名(名) こうみやうに同じ。

かこういめ 公明(名) 公平にして明白なる事。

かこういめ 高名(名) 名高き事。●高き評判。

かこういめ 高免(名) 手紙の詞。免すの敬語。●御免。

かこういめ 功名(名) 「一」功名名譽と。「二」手柄。

かこういめ 高名(名) 名高き事。

かこういめ 高妙(名) 高尙にして絶妙なる事。△(雅) 高妙なる。(副)―高妙に。

かこういめ 公使(名) 一國を代表して外交の衝に當たる官職。特命全權公使、辨理公使、代理公使等の別あり各其權限を異にす。

かこういめ

かこういめ

かこういめ

かこういめ

こうし

公私(名) 公と私と。

かこうし

孝子(名) 孝行なる子。

かこうし

格子(名) 「一」細き四角の木を縦横に組合はせ間を透かして造りたる戸。●格子戸。……古へ貴族の家にては之を以て戸締とせり。

「二」だ織物の一種。格子目の如き筋を織り出したるもの。

かこうし

講師(名) 「一」講義する人。●教師。「二」歌會にて披講の役。

かこうし

厚紙(名) 鳥の子をいふ。……薄紙に對して。

(平家)

かこうし

考試(名) 學業の試験。

かこうし

嚆矢(名) 物の最初。●起原。●濫觴。

こうじ

工事(名) 普請。

かこうじ

柑子(名) 「一」果物の名。蜜柑の種類の總名。

「二」蜜柑の類にして實小さく種大きくして味酸きもの。

かこうじ

好事(名) めでたき事。●喜ぶべき事。●善事。

●吉事。

かこうじ

講師(名) 古代僧官の名。國分寺の住持。

かこうじ

勘事(名) 勘當に同じ。

がこうし

郷土(名) 知行なくして平生は農業に従事する

武士。

がこふし

合子(名) 食器の名。蓋と身と合ふやうに作れるもの。(圖)

かこうじいろ

柑千色(名) 色の名。蜜柑などの熟したる如き色。

こうし

口書(名) くらがき。●口供。

こふし

劫初(名) 劫の初期。世界の開闢。○諺曲「初劫よりこのかた」

かこうし

講書(名) 書物の講義。

かこうし

校書(名) 藝妓の異名。

かこうしよう

考證(名) 證據を擧げて意見を述ぶる事。

かこうし

高尙(名) 高く奥深き事。●上品。△(形)―高尙なる。(副)―高尙に。

かこうし

高聲(名) たかこゑ。●こわだか。

こうじ

口上(名) 「一」手紙などを用ひず。言葉にて述ぶる事。●口述。「二」芝居淨瑠璃などの始に外題又は演奏者の姓名等を見物人に對して述ぶる事。

かこうじ

交情(名) 交際の情誼。



かこうじやシヨウ

強情(名) 我意を張る性質。●頑固。△(形)―強情なる。(副)―強情に。

かこうしようにん

公證人(名) 當事者の間に立ちて總べての契約に公正證書を作り得る半官半民の職務。

かこうしよぐ

好色(名) 色を好む事。●色このみ。

後室(名)

貴人の後家。

かこうしつ

膠漆(名) 膠と漆とにて付けたる如く密着して離れぬ交情。

かこうじつ

口實(名) 言譯にする材料。

かこうじつぷう

五雨十風(名) 五日に一度雨降り十日に一度大風吹くの意にて時候に不順なきをいふ。……天下泰平五穀豊穰の意味に用ふ。

かこうしん

功臣(名) 功勞ある臣下。

かこうしん

後進(名) 學問官途等に後より進み行く人。

かこうしん

庚申(名) 「一」千支の名。かのえさる。「二」庚申待。○枕「庚申せさせ給ひて」「三」庚申待に祭らるゝ神。

孝心(名) 孝行の心。

かこうしん

幸甚(句) 手紙の詞。幸甚し。●仕合の至。●本意至極。

かこうしんばら

庚申薔薇(名) 薔薇の一種。年中絶えず花咲くもの。庚申の時毎にいつも花ある故の名。庚申は隔月にあるなり。

かこうしんだう

庚申堂(名) 庚申を祀りたる堂。

かこうしんづか

庚申塚(名) 庚申を祀りたる塚。

かこうしんまち

庚申待(名) 「一」庚申の夜に行ふ帝釋天および青面金剛の祭。「二」此夜は疑る事を忌むとて終夜打集まりて歌よみ物語し遊戯を爲して遊ぶ事あり。其稱。

かこうしんまつり

庚申祭(名) 庚申待に同じ。

かこうしんせいば

行人征馬(句) 往來する人馬。

かこうしや

巧者(名) 上手。●達者。●熟練。△(形)―巧者なる。(副)―巧者に。

かこうしや

郷社(名) 神社の格式。縣社の次に位して郷にて祭らるゝ社。

かこうしや

家奢(名) 奢り。●榮花。

かこうしや

恒沙(名) 萬恒河沙に同じ。△(形)―恒沙の。

かこうしやぐ

講釋(名) 「一」文意を説明解釋する事。「二」軍談。

かこうしやぐし

講釋師(名) 軍談を業とする人。●講談

かこうしき

師。  
香敷(名) 香を焚く時火の上に置き之に香を載せて焚くもの。●火敷。

こうじゆ

鴻儒(名) 大學者。●碩學。

かこうじゆん

孝順(名) 孝にして順なる事。△(形)―孝順なる。(副)―孝順に。

こうしゆう

公衆(名) 世間一般の人。

かこうしゆふ

講習(名) 講究練習する事。△(動)―講習す。

こうひ

口碑(名) 言ひ傳へ。●傳説。

こうび

後備(名) 「一」あごぞなへ。●後軍。「二」現行の兵制豫備に次ぎて召集せらるべき兵。

こうひやヒヨウ

公評(名) 世間一般の評判。

かこうひやヒヨウ

好評(名) 好き評判。  
業病(名) 業によりて發したる病。●人を苦しませ惱ませなごしたる報にて受くる病。

かこうひねり

紙捻(名) 元結の古名。

かこうびん

幸便(名) 都合のよき便り。

かこうもり

蝙蝠(名) 肉翅獣の名。體は土龍に似て肉翅

かこうもりがさ

あり。其端に鉤ありて以て身を樹枝に掛ける。薄暮より出でて飛行し小虫を捕へ食ふもの。  
蝙蝠傘(名) 傘の一種。鍔又は鯨の骨に絹みぎ張りて蝙蝠の翅を廣けたる形に作れるもの。

がこうもん

拷問(名) 暴力を用ひて罪人を訊問する事。水責、火責の類。△(動)―拷問す。

こうまろう

紅毛(名) 和蘭陀人の異名。維新前の詞。網目(名) 大綱と細目と。

かこうもく

後世(名) 後々の世。●後代。

こうせつ

後生(名) 後々に生れ出づる人。

かこうせつ

校正(名) 文章の彼と此とを較べ見て誤を正す事。●校合。△(動)―校正す。

かこうせい

行星(名) 天文學上の詞。遊星に同じ。

かこうせい

降生(名) 其靈天より降りて人間に生る事。●降誕。○「耶穌降生紀元」

こうせい

恒星(名) 天文學上の詞。其位置一定不變にして自ら光を放つ星。●太陽。

かこうせち

講説(名) 巧拙(名) 巧なる事と拙き事と。●上手下手。

かこうせつ

かこうせつ

巷説(名) 道路の噂。●風評。  
交接(名) 男女雌雄の交り。●交合。

かこうせつ

講説(名) 講義。●講釋。●説明。△(動)―  
講説す。

かこうせん

口銭(名) 商業上の詞。手數料。  
抗戦(名) 抵抗して戦ふ事。●對戰。△(動)―  
抗戦す。

かこうせん

香煎(名) 白湯に投じて飲む香ばしき粉。  
公然(副) おほやけに。●表面に。

かこうせん

傲然(名) 傲慢無禮なる有様。  
幸(他動サ變) 「一」行幸する。「二」寵愛する。

かこうす

航(他動サ變) 航海する。  
抗(他動サ變) 抵抗する。

かこうす

好(他動サ變) 引出物さして贈る。●着として  
出だす。

かこうす

好事(名) 珍奇を好む事。●古物を好む事。●  
物すき。

かこうす

困(自動サ變) 困難する。●こまる。(雅)  
薨(自動サ變) 薨去になる。●おかくれになる。

かこうす

講(他動サ變) 「一」講義する。「二」講習する。  
「三」詩歌を披講する。

かこうす

號(他動サ變) 名づくる。●稱する。●唱ふる。  
●呼ぶ。●號さなす。

かこうす

香水(名) 「一」香を加へたる水。佛家にて灌  
頂などの時に用ふるもの。「二」化粧品の名。  
薔薇丁子などにて製したる香のよき水。

かこうす

洪水(名) おほみづ。●水害。  
好事家(名) 好事なる人。

かこうす

此(斯代) 香をすくふ匙。  
人「この山」

この

これを名詞に續くる時の詞。○「この」

このは

木葉(名) 「一」木の葉。「二」落ちたる木の葉。●  
落葉。

このは

化石の一種。木葉の形の現は  
るゝもの。

このは

木葉(名) 小きき鱗を木葉の如く重ね  
て乾したるもの。

このは

木葉(名) 落葉を掻き寄するもの。松葉  
搔の類。

このは

木花(名) 「一」櫻の花。「二」梅の花。

このは

木葉武者(名) 雜兵。●弱武者。  
木葉衣(名) 落葉衣に同じ。



このはてんぐ

木葉天狗(名) 小天狗の異名。

このはざる

木葉猿(名) 小猿。

このほど

此程(副) 此頃。●此間。

このはほう

此方(代) 我輩。●我。●身共。

このまの

此殿(名) 催馬樂の曲名。

このまのたし

此殿之西(名) 催馬樂の曲名。

このまのおく

此殿之奥(名) 催馬樂の曲名。

このちゅう

此中(副) 此間中。●此程中。●先達中。●

近日。

このわた

海鼠腸(名) 食品の名。海鼠の腸の鹽辛。

このかた

此方(副) 其時以來。●其以後。

このかみ

兄(名) あに。

このよ

此世(名) 現在の世。●現世。●今世。●存生中。

このたび

此度(名) 今度。●今回。

このね

木根(名) 木の根。

このむ

好(他動四段) 「二」すく。●愛する。●嗜む。

〔二〕望む。●所望する。

このく

五句(名) 短歌の第五句。●結句。

このくれ

木暗(名) 首夏の頃若葉茂りて木の向の暗き

事。

このくれやみ

木暗闇(枕) 木のくれに同じ

このま

木間(名) 木と木との間。

このまし

好(形。形状言シク活) 「二」好むべくある。

「二」好色がまし。○源氏「殿上人ごもの好ましきなごは朝夕の露わけありくを其頃の

役にて」

このころ

此頃(副) 近頃。●此節。●此程。

このかゝうべ

兄部(名) 鎌倉時代の役名。力者の長にて

長刀など持ち將軍の供するもの。

このゑ

近衛(名) 「二」近衛府の畧。「二」近衛兵の畧。

このゑへう

近衛兵(名) 現今の制。天皇の御身を護衛

し奉る兵。

このゑりゅう

近衛流(名) 書道の一派。近衛關白信基

の書き創めたるもの。

このゑつかさ

近衛府(名) このゑふに同じ。

このゑふ

近衛府(名) 官廳

の名。内裏の守

護を掌る役所。

左右の兩衛府に

分る。

近衛櫻(名)

古代模様の名。

このゑづら



〔副〕

このあみかど  
このてがしほ

近衛御門(名) 陽明門の異名。  
兒手柏(名) 木の名。檜の種類にて。葉の萌え出づる時は小兒の手を合はせたるが如きもの。

このあひだ

此間(副) 〔一〕此頃。〔二〕先頃。●先日。

このきみ

此君(名) 竹の異名。支那にて晋の王子猷が竹を植ゑて何可<sup>ソク</sup>一日無<sup>カガ</sup>此君<sup>ガ</sup>さいへる故事。

このめ

木芽(名) 〔一〕木より出づる芽。〔二〕茶の異名。

このめづき

木芽月(名) 太陰曆二月の異名。

このみ

木質(名) 藥物。

このみ

好(名) 〔一〕好む事。●嗜好。〔二〕望み。●所望。

このみち

木道(名) 大工の術。

このみちのたくみ

木道匠(名) 木匠。●大工。●番匠。

このしろ

鯨。鯛(名) 魚の名。鯨に似て平たく小骨の多きもの。小さきは小鯨と稱ふ。

このした

木下(名) 木の下。●木陰。

このしたやみ

木下闇(名) 首夏の頭若葉茂りて木陰の暗き事。

このもど

木の下(名) 木のした。●木陰。

このもかのも

此面彼面(名) こちらあちら。●こなたかなた。●遠近。○後撰「山風の吹きまに／＼もみぢ葉はこのもかにもに散りぬべらなり」

このもし

好(形。形状言シク活) 好ましに同じ。

このもし

穀(名) 穀物。●穀類。

このもし

刻(名) 〔一〕時間。●時刻。●刻限。○「子の刻」寅の刻。〔二〕特には太陰曆時代二時間の五分の一。○「丑の二刻」卯の三刻。〔三〕又同時代

このもし

刻「午の下刻」四「彫刻。樹目の名。十斗。

このもし

石(名) 殘酷。

このもし

拔(他動四段) むしり取る。●もぎ取る。●しごく。●掻き落とす。

このもし

漕(他動四段) 櫂又は櫓を操りて船を進ます。

このもし

玉(名) きよくに同じ。たま。(雅)

このもし

獄(名) 獄屋。●牢屋。

このもし

曲(名) きよくに同じ。音樂の曲。(雅)

このもし

極(副) きはめて。●至極。○「く面白く」俗

こころ

國威(名) 國の威光。

こころ

極意(名) 技術の奥儀。●秘傳。

こころ

黒印(名) 貨幣、度量衡などの監査證に其筋にて押す印。

こころ

國論(名) 國內一般の議論。●國家の輿論。

こころ

黒板(名) 塗板マシロと同じ。

こころ

國母(名) 天皇の御母君。

こころ

國法(名) 國の法律。●國典。

こころ

國幣社(名) 現今神社格式の稱。地方官をして祭祀せしめらるるもの。

こころ

國土(名) 大地球。●土地。

こころ

小口(名) 「一」木材の横に切りたる面。「二」總べて物の横断面。「三」物事の初まり。●端緒。

こころ

小口彫(名) 木材の横断面になしたる彫刻。

こころ

國朝(名) 我國。●本朝。

こころ

小口袴(名) 袴の一種。指貫の如く括りありて夏は生絹冬は練にて造る。天皇蹴鞠の御遊びなどに召すもの。大口の袴に對しての名。

こころ

極重惡人(名) 佛教上の最大惡人。

こころ

酷吏(名) 殘酷なる役人。

こころ

國恩(名) 國家の恩。

こころ

國王(名) 其國の王たる人。

こころ

御光(名) 神佛日月などの光を尊びていふ詞。神像の背面に射出せる光。

こころ

後光(名) 佛像の背面に射出せる光。

こころ

木鐸(名) 鐸の一種。木にて造りたるもの。

こころ

五月(名) 年の第五番目の月。

こころ

五官(名) 人身の五つの官能。即ち視官、聽官、味官、聽官、觸官。

こころ

國家(名) 上主權者より下一個人に至るまで國民全體の國としての團結。

こころ

國學(名) 「一」中古の制。國々に置きて郡司の子弟を教育せしめたる學校。「二」我國古代の歴史、律令、古實、公事、歌文等を研究する學問。●和學。

こころ

國體(名) 一國の體裁。●一國の體面。

こころ

玉帶(名) 石の帯の一種。玉を以て飾りたるもの。

こころ

穀斷(名) 神佛に誓願して穀類を食はぬ事。

こころ

黒檀(名) 木の名。實堅く色黒く器物に造り

て珍重するもの。琉球又は南洋諸島よりの輸入品。

こくれば 木暗(名) このくれに同じ。

こくそ (名) 蠶の糞。(和名抄)

告訴(名) 被害者自ら其加害者を相手取りて起訴する事。△(動)―告訴す。

こくそく 國俗(名) 其國の風俗。

こくぞく 國賊(國) 國に害をなす悪徒。

こくそく 小具足(名) 小具足出立に同じ。

こくそくでたち 小具足出立(名) 武裝の名。白帷子を着て上に肩衣を掛けしゅう袴をはきたる

出立。

こくそく 獄卒(名) 〔一〕獄屋の取締をなす役人。●牢

一番。今の看守押丁の類。〔二〕地獄にて死人

を呵責する鬼。(佛教)

こくさう 國葬(名) 大功ありし人に對して國家にて執

行する葬儀。

こくねち 極熱(名) 極めて熱き事。(源氏)

こくなん 國難(名) 國家の厄難。内亂外患の類。

こくら 小倉(名) 小倉織の略。

こくらおり 小倉織(名) 木綿織物の名。豊前の國小倉

近傍より多く織り出だすもの。袴地、帶地、洋服地などに用ふ。

こくらく 極樂(名) 佛果を得たる死人が生れ行く世

界。常に蓮臺の上に座して無上の極樂を受

くるところ。●淨土。

こくむ 國務(名) 一國の行政事務。●政務。●政事。●國政。

こくもん 古訓(名) 漢字漢文に附けたる古き和訓。

こくもん 孤軍(名) 味方に離れたる小勢の軍隊。

こくう 虚空(名) おぼぞら。

こくう 御供(名) 神佛に供ふる食物。

こくうぼう 虚空藏(名) 菩薩の名。右手に劍を持ち左

手に如意寶珠を持つもの。

こくうまい 御供米(名) 御供の料の米。

こくうでん 御供田(名) 御供米を作る田。

こくうし 御供所(名) 御供を調理する處。

こくうすゐ 御供水(名) 御供に用ふる水。

こくのおび 玉の帯(名) こくたいに同じ。

こくのもの 曲物(名) 神樂歌、催馬樂などの謠物に對

して歌詞なき楽曲をいふ稱へ。(源氏)

こくく 刻苦(名) 堪へ難き程の辛苦。△(動)―刻苦す。

こくわい

國會(名) 一國の立法事務に參與する議會。我邦にては貴族院衆議院より成立し帝國議會と稱す。

こくや

獄屋(名) 牢屋。

こくげつ

極月(名) 十二月の異名。

こくげん

刻限(名) 「一」豫定せし限りの時刻。●時限。「二」時間。●時刻。

こくふう

國風(名) 「一」其國の風俗習慣。「二」和歌。

こくこ

國庫(名) 國家の金庫。

こくかう

國交(名) 國と國との交際。

こくご

極極(副) きはめて。

こくえん

國益(名) 國家の利益。

こくてん

國典(名) 「一」國の法律。●國法。「二」我國の書籍。おもには神典國史律令の類。

こくちゆう

國債(名) 國內の公債。

こくこく

國際(名) 國と國との間柄。

こくしき

極彩色(名) 繪畫の詞。極めて濃厚艶麗なる彩色。

こくせい

小草生月(名) 太陰曆二月の異名。

こくさん

國産(名) 其國の産物。

こくし

國忌(名) 先帝の御忌日。

こくき

國旗(名) 其國を代表する徽號の旗。

こくきん

國禁(名) 國の禁制。●法度。

こくじん

國民(名) 國家の一部分としての人民。

こくみんぐん

國民軍(名) 現今の兵制。十七歳より四十歳までの男子は凌らずに編入せられて

國家危急の時の召集に應ずべきもの。

こくし

國史(名) 「一」自國の歴史。「二」特に朝廷にて撰ばれたる正史。

こくし

國師(名) 天皇の御師範たりし僧に賜はる諡。禪宗の僧に限る。……夢想國師の類。

こくし

國司(名) 「一」國の守。●國守。「二」中古地方官の總稱。

こくじ

國字(名) 「一」自國の文字。「二」假名。

こくじ

國事(名) 其國の政務に關する事件。

こくじはん

國事犯(名) 時の政府に反對して犯したる罪。

こくじ

(名) 食品の名。鯉又は鮒など入れたる濃き味噌汁。

こくじ

極上(名) 極めて上等なる事。●最上。

こくじ

飛切。●飛切。

こくじ

能面翁の一種。色の黒きもの。

こくじ

能面翁の一種。色の黒きもの。

こくじ

能面翁の一種。色の黒きもの。

こくじ

能面翁の一種。色の黒きもの。

こくじ

能面翁の一種。色の黒きもの。

こくし 國守(名) 〔一〕中古地方の長官。●國の守。〔二〕

徳川時代大名格式の稱。一藩にて一箇國全土を所領するもの。即ち薩摩の島津、加賀の前田等の如し。

こくし 國手(名) 上手なる醫者。

こくひ 極秘(名) 極々の秘密。

こくびやく 黑白(名) 〔一〕黒と白と。〔二〕邪正。

こくも 國母(名) こくほに同じ。

こくもち 黒餅(名) 紋の名。中に模様なき眞丸まんだまの形。

こくもつ 穀物(名) 五穀。

こくもん 獄門(名) 昔の刑罰の名。首を斬りて牢獄の門に懸くるもの。●梟首。

こくぜ 國是(名) 國論の是とする所。●一國施政の大方針。

こくすゐ 國粹(名) 自國特有の美風長所。

こくすゐ 極體(名)(副) 極々の體一。●至極。●最第一。

こくすゐのそと 曲水宴(名) きよくすゐのねんに同じ。

こくすり 粉薬(名) 粉にて飲むやうに製したる薬。●散薬。

こむら 小屋(名) 〔一〕小ぢき家。〔二〕假屋。〔三〕ひたき

こや 蠶屋(名) 養蠶する家。(散木) や。

こや 午夜(名) 夜の眞中。●午後十二時。●子の刻。

こや 後夜(名) 〔一〕時刻の稱へ。子の三刻より丑の刻に至るの間。即ち今の午前二時頃。〔二〕後夜の時刻にする寺の勤め。

こやる (自動四段) こやすに同じ。臥す。(記)

こやがけ 小屋掛(名) 假小屋を造る事。

こやつ 此奴(代) このやつ。●こいつ。

こやく 子役(名) 芝居にて子供の役をなす少年役者。

こやくにん 小役人(名) 下等の官吏。

こやま 小山(名) 小きき山。●低き山。

こやで (名) 小枝。○萬葉「椎のこやで」

こやし 肥(名) こえ。●肥料。

こやす 子安(名) 安産。

こやす 肥(他動四段) 肥はさす。

こやす (自動四段) 臥す。●倒る。○萬葉「波の音のさわぐ濤の。奥津城に妹かこやせる」

こやすがひい 子安貝(名) 貝の名。赤黒き斑紋ありて艶あり殼の合はせ目のまごころに齒の如きまごころのあるもの。

こま 獨樂(名) 遊戯品の名。心棒を立て、くるくると廻すやうに作れるもの。

こま 駒(名) 「一」子馬又は小馬の意。◎馬の手。「二」馬。「三」將棋、双六の手に取りて指し打つもの。「四」三味線の糸を載する枕の如きもの。

こま 木間(名) 木の間。○頼政集「住吉の松の木間よりながむれば月おちかゝる淡路島山」

こま 小間(名) 物の隙。●透間。

こま 胡麻(名) 「一」草の名。夏紫色又は白の花咲き秋稜ある實を結ぶ黑白の二種あり共に食用とし又油を搾るもの。「二」胡麻の實。

こま 護摩(名) 佛法にて五大明王など祈る時に前にて火を焚く事。一切の魔軍を焼き亡ぼすの意にて之を行ふ。

こまひい 小舞(名) 「一」酒席などにて演ずる一段の短かき舞。「二」狂言にて演ずる仕舞。

こまひい 木舞(名) 「一」軒の端に出でたる垂木の先。「二」壁の骨となる竹。

こまひい 狛犬(名) 宮殿の扉の押へ又は神社の前に据ゑ置く一對の動物の形。唐獅子に似て又犬

に似たるもの。古へ高麗より渡りし犬の形なりといふ。

こまづかざね 五枚兜(名) 五枚の鍔ある兜。

こまにしね 高麗錦(名) 織物の名。錦の一種。高麗より舶來せしもの。

こまぼし 狛鉾(名) 雅樂の曲名。

こまぼし 胡麻星(名) 謡曲の文字の右傍に付したる節附の點。◎其形胡麻粒に似たる故の名。

こまぼり 駒鳥(名) 鳥の名。鶯に似て脊紅に腹白く鳴く聲美しきもの。

こまぼり 小間取(名) 勝負事をする時其人数を左右に一人づゝ順次に交ぜ分くる事。たとへば左を

一、三、五、七、九とし右を二、四、六、八、十とするの類。○源氏「殿上人も大學のいと多うつとひて左右にこまぼりに方分かせ給へり」

こまぢ 小町(名) 禁中にて女官の住む町。

こまぢく 拱(他動四段) 腕を組む。

こまぢく 困(自動四段) 困しむ。●困難する。●困却する。●艱む。●艱難する。

こまはり 小廻(名) 「一」能樂にて舞臺を小さく廻る

こまか

事。「こ」をれより轉して一身の引き廻し。細細かき事。●細密。●微細。(形)「こまか」なる。(副)「こまかに」。

こまかた

駒方(名) 馬方。●馬の口取。(空穗) 高麗樂(名) 雅樂の一種。高麗國より傳來したるものにて舞樂の時は唐樂と並びて必ず二曲一番として演せらる。

こまがく

(自動四段) 老の立ち返り若やく。●若かへる。(雅)

こまがへる

細(形。形状言ク活) さね、こまかである。駒頭(名) 鎧の札の名。將某の駒を並へたる形。(圖)

こまかし

胡麻頭(名) 鎧の札の名。(圖) (他動四段) まぎらかす。●曖昧にする。(雅)

こまがしら

駒除(名) 駒よせに同じ。駒寄(名) 柵の一種。門前などに造る丈低きもの。●駒除。●馬止。

こまがしら

小股(名) またぎて歩く足の廣がりの小なき事。

こまかす

護摩壇(名) 護摩を焚く壇。

こまよけ

小松(名) 小さき松の木。●若松。小松原(名) 小松のむらがり生えたる原。木祭(名) 木の神の祭。●山神の祭。……樵夫の木を代る時に行ふ事。○夫木「柚人は斧に幣帛さりそへて木祭すらし山深く入る」

こまよせ

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまたん

で出張し迎ふる事。 紐の結び方の名。まむすびに關ま

こまじ

小松(名) 小松のむらがり生えたる原。

こまじばら

木祭(名) 木の神の祭。●山神の祭。……樵夫の木を代る時に行ふ事。○夫木「柚人は斧に幣帛さりそへて木祭すらし山深く入る」

こまじり

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の

こまじら

狼狽(名) 狼狽の古名。(大鏡) 駒迎(名) 古へ八月十五日(後故ありて十六日となる)に行はれたる公事。諸國の牧より貢獻する馬を左近少將勅使にて逢坂の



同じ。

こまのほひ

胡麻灰(名) 道中にて旅人を欺き其路銀なご奪ふ一種の賊。

こまのものがたり

(名) 古代物語の名。世に傳はらざるもの。

こまのあぶら

胡麻油(名) 油の一種。胡麻の實より搾りたるもの。婦人の頭髮に用ひ又食品を揚ぐるなどに用ふ。

こまへ

鼓膜(名) 耳の中にありて音響を感ずる薄膜。

こまへら

木枕(名) 木にて造りたる枕。

こまへら

小枕(名) 箱枕の上に置く小さき括り枕。

こまへら

駒競(名) 競馬。  
〔一〕こまへ。〔二〕濃き事。●厚き事……  
(形)——こまやかなる。〔副〕——こまやかに。

こまげ

「女房の曹司町ごもあてく」のこまげぞ大方の事よりもめでたかりける」

こまげた

駒下駄(名) 下駄の一種。臺を削りて齒を造りたるもの。

こまげえ

高麗笛(名) 高麗樂に用ふる横笛。

こまひ

細細(副) 細かく。●こせこせ。(又)——こま

こまひ

こまかに。●くばしく。

こまひ

高麗遊(名) 高麗樂に同じ。(空穂)

こまひ

(名) 魚の名。干したるひしこ。●田作り。

こまひ

胡麻味噌(名) 食品の名。味噌に胡麻を加へて摺りたるもの。

こまひ

胡麻鹽(名) 〔一〕食品の名。煎りたる胡麻に鹽を混ぜたるもの。〔二〕總べて胡麻鹽の如く黑白混合せるもの。

こまひ

高麗人(名) 高麗の國の人。

こまひ

駒牽(名) 〔一〕古へ禁中にて四月二十八日行はれたる公事。五月にあるべき騎射の乗馬と騎者とを召し出して其準備を天覽あらせらるゝの式。〔二〕又八月十六日に行はれたる公事。年々の例として信濃の御牧より貢獻せし馬を牽き出さしめて天覽あらせらるゝの式。

こまひ

小間物(名) 髪道具、化粧道具等すべて細かき裝飾品の總名。

こまひ

植物の名。湿地に生ずる細かき草。

こまひ

苦(名)

こけ (名) 鱗。

こけ (名) 馬鹿。●白痴。(俗)

こけ (名) 焦ぐる事。又は其物。

こけ (名) 後家(名) 夫の死後に残りたる妻。●やもめ。

こけ (名) 碁笥(名) 碁石を入れる器。

こけい (名) 御禊(名) 重き神事の行はるゝ前水邊に出で、身を清むる式。大嘗會および加茂の葵祭などには鴨川にて行はる。

こけい (名) 御慶(名) 御祝。●御祝儀。

こけいたい (名) 固形體(名) 固體に同じ。

こけいん (名) 御家人(名) 徳川氏にて將軍に拜謁するを得ざる資格の家臣。

こけちや (名) 焦茶(名) 染色の名。茶色の濃きもの。

こけつ (名) 虎穴(名) 虎の住み居る穴。

こけら (名) 「一」木片。●こつば。「二」屋根板の一種。極めて薄き檜などの板。

こけら (名) 鱗。

こけらぶき (名) こけらにて屋根を葺く事。又は其葺きたる屋根。

こけん (名) 沽券(名) 土地の所有を證明する手形。●地券。

こけん (名) 古言(名) 「一」古代の言語。「二」特に奈良朝

時代以前の言語。

こげん (名) 御見(名) 婦人の詞。御目に掛かる事。●拜眉。●拜謁。(俗)

こげん (名) 語原(名) 其言語の本源。

こげむしろ (名) 苔庭(名) 「一」薙を敷きたる如く地上一面に生えたる苔。「二」苔を薙に代用して其上に座する事。

こけうた (名) 拙き和歌。●腰折歌。(無名抄)

こけのころも (名) 昔衣(名) こけころもに同じ。

こけのした (名) 苦下(名) 死人の居る所。墓の下。●地下。

こけごろも (名) 昔衣(名) 「一」衣の如く岩などに纏はり生えたる苔。「二」遊世者の着る衣。●僧衣。

こぶ (名) 昆布(名) こんぶの略。

こぶ (名) 瘤(名) 「一」一種の病により皮膚に高く突出して出づる肉。「二」總べて瘤に似たる形のもの。

こぶ (名) 媚(自動上二段) 人の寵愛を求めて機嫌を取る。●へつらふ。

こぶ (名) 小振(名) 小形。

こぶ (名) 小降(名) 雨雪などの少しづつふる事。

こぶ (名) 木深形。形状言々活) 立木の奥深く生ひ繁りたる有様。

こぶつ

古物(名) 古き物。●古代の物。

こぶつ

後佛(名) 彌勒佛を云ふ。……釋迦を前佛といふに對して。……彌勒の出世は五十六億七千万歳の後と佛書にあり(佛敎)

こぶん

古墳(名) 古き墓。

こぶん

古文(名) 古代の文章。

こぶん

子分(名) 假に子となりたる人。

こぶん

胡粉(名) 繪具に用ふる白き粉。

こぶん

御分(代) あなた。●御身。●御手前。●足下。

こふう

古風(名) 「一」古代の風俗。●むかしふう。「二」奈良朝以前の作に擬したる歌文の体。

こふう

御符(名) 神社、佛閣より出だす守り札。●御札。

こふう

呉服(名) 織物類の總名。

こふう

小文(名) 半切紙に書きたる手紙。

こふう

拳(名) 握り詰めたる手先。

こふう

辛夷(名) 木の名。木蓮に似て白き花咲くもの。

こふう

簞々(名) 各の物一つづい。●この物もあの物も皆。

こふう

此處(代) 「一」身に接したる程の近き場所をいふ詞。●此さころ。●當地。●當處。「二」我

こふう

國。

こふう

古語(名) 「一」古代の言語。「二」古人の言語。

こふう

五鈷(名) 佛具の名。兩端尖くして五

こふう

朕に割れ。眞言僧の祈禱する時



なご手に把るもの。(圖)

こふう

午後(名) 正午より後。●晝後。

こふう

後五(名) 後五百歳の略。○謡曲「後五の時世の今更に。猶執心の見佛の縁」

こふう

心(名) 「一」動物の意識を支配する能力。●魂。●精神。「二」考へ。●思。「三」感情。「四」意味。「五」中心。●中央。

こふう

心入(名) 心を入るゝ事。●熱心。●注意。

こふう

心(名) 心のいらゝする事。

こふう

心意氣(名) 心持。●心ばせ。

こふう

心葉(名) 古へ物の裝飾に附けたる梅の折枝。又は木草の枝。「一」小忌衣オモカサを着る時。冠に挿して用ふるもの。……日蔭糸を見よ。「二」贈物などする時。箱壺の蓋などの紐の處に結び付けて用ふるもの。○源氏「瑠璃の壺。二つすゐて大きにまろがしつゝ入れ給へり。心葉紺瑠璃には五葉の枝。白きに

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

こふう

は梅をえりて」

こころばむ

(自動四段) 氣がある。●氣が乗る。●情がある。○源氏「くはや昨日の返りごこちやしく心ばみ返さるゝさて」

こころばせ

(名) こころばへ。●心意氣。●志操。

こころばへ

(名) 「一」心意氣。●心ばせ。●心持。「二」趣向。○源氏「香壺の御箱ごものやう。壺の姿。火取の心ばへも目なれぬさまに」

こころばし

心走(名) 胸騒ぎ。(源氏)

こころにくし

心憎(形。形状言ク活) おくゆかし。●奥深し。(雅)

こころぼそし

心細(形。形状言ク活) 頼み少なし。●たよりなし。●ものさびし。

こころえ

(副) 我心のしわざにて。●我心にて。●他人に制せられず。○紫日記「心と老いつきやつして」

こころえ

心利(名) 利心に同じ。強き心。●げんきな心。○萬葉「出で立たむ力を無みと籠り居て君に戀ふるに心ごもなし」

こころえ

心取(名) 機嫌取り。(源氏)

こころおほえ

心覺(名) 心の中に覺え居る事。●記憶。

こころおどり

心劣(名) 想像より實際が劣る事。●思ひしより下る事。(雅)

こころをさる

(句) 機嫌を取る。(源氏)

こころおそし

心遲(形。形状言ク活) 心のにぶき。●さりのわるき。●愚鈍である。(雅)

こころおく

心置(自動四段) 遠慮する。●隔心する。

こころおくれ

心後(名) 心の臆する事。●氣おくれ。

こころおこり

心傲(名) 傲慢。●自慢。●自負。●うねほれ。(雅)

こころおきて

心挺(名) 心の立方。●心の定め(雅)

こころがはり

心變(名) 心を他に移す事。●盟約に背く事。●敵に内通する事。

こころがかり

心懸(名) けんから。●心配。

こころから

(副) 我心にて。我心のしわざにて。●しんから。

こころがく

心掛(他動下二段) 常に心に掛け居る。●注意する。●氣に掛くる。

こころがまへ

心構(名) 「一」心組。●心支度。●用意。●覺悟。「二」注意。●心得。

こころがけ

心掛(名) 心に掛くる事。●心得方。●志。

こころがへ

心替(名) 我心と人の心と取り替ふる事。

こころよし

●心の交換。○古今「心がへするものにもが片戀は苦しきものご人に知らせん」  
心弱(形。形狀言ク活) 感情に動かされて心の折れ易き。●めいし。●いくちのなき。

こころよし

快(形。形狀言ク活) 「一」心中楽しく感ずる有様。●愉快なる。「二」病癒むて苦痛の止む有様。

こころよし

心寄(名) 精神を専ら其方へ寄する事。「一」あてにする事。●望を屬する事。○宇治「僧たち宵のつれづれにいざ搔餅せんといひけるを此兒心よせに聞きけり」「二」貢

最する事。●深く愛する事。○源氏「院の御心よせもあればなるべし」同「例の御心よせなる梅の香をめでおにするな」

心違(名) 「一」機嫌を損ふ事。●立腹。「二」不和。

心高(形。形狀言ク活) 心のけだかき。●心の高尚なる。

こころたかし

心立(自動四段) 「一」思ひ立つ。●思ひ起す。「二」心の振ひ起さる。●氣の立つ。

こころたかし

心立(自動四段) 「一」思ひ立つ。●思ひ起す。「二」心の振ひ起さる。●氣の立つ。

こころたらし

(源氏) (名) 心の満足する事。○萬葉「雨もふらぬか心たらしに」

こころたまひ

心魂(名) 心と魂と。

こころたて

心立(名) 心の立方。●心意氣。●心ばせ。

こころぞく

心添(名) 心を添ふる事。●注意。●忠告。

こころつかひ

心遣(名) 心を遣ふ事。●氣遣。●懸念。●心配。△(動)―心遣す。

こころつから

(副) 我心のしわざにて。●心中にておのづから。●心からにて。○後撰「年毎に雲路まごほぬ雁がれば心づからや秋を知るらん」

こころよし

心強(形。形狀言ク活) 「一」心丈夫である。●氣つよし。「二」感情の爲めに動かさぬ有様。●無情である。●つれなし。

こころづく

心付(自動四段) 氣がつく。●其事に心の行き届く。

こころづく

心付(他動下二段) 心付きたる事を他に告げて用心さする。●注意する。

こころづく

心盡(名) 「一」其物事の爲めに心を盡す事。●配慮。●心配。●盡力。「二」戀、嘆き、

憂などの爲めに心の限り出し盡して苦勞する事。○續千載「知らせばや頼むる宵の松の戸に更け行く月の心づくしを」

心付(名)

(一)他に注意を促がす事。●心添。(二)氣を利かして金錢など與ふる事。

心付(名)

「一」心付く事。●氣が付く事。「二」心に好ましく思ひ付く事。○後撰「人の家より物見に出づる車を見て心つきに覺む侍りければ」

心付無(形。形言ク活)

氣にくはぬ。●あいそのない。●厭ふべし。(雅)

心根(名)

心の底。●しんてい。心習(名) 心にて作りたる習慣。●心癖。

心(副)

心の慰めに。●氣晴らしに。○萬葉「いぶせみさ心なぐさに。撫子を宿に蒔きおふし」

心無(名)

思慮分別に乏しき人。心無(形。形言ク活) 「一」情なし。●あいそなし。「二」遠慮なし。●斟酌なし。

心無(形。形言ク活)

「一」情なし。●あいそなし。「二」遠慮なし。●斟酌なし。

心動上(二段)

ためして見る。●試験する。●やつて見る。

心得(他動下二段)

合點する。●承知する。●理解する。

心美(形。形言ク活)

心の愛らしき。●心のおさなしき。●心のおだやかなる(雅)

心(名)

心の所爲。●心持のせい。(源氏)

心占(名)

心中にて判斷する占。(源氏)

心鬼(名)

我心中に住みて我心を苦しめ腦ますもの……惡事など犯したる覺ぬある。人は咎めれど。先づ我が良心に咎めらるゝを云ふ。○源氏「宮の御心の鬼にいと苦しむ」

心暗(名)

他の愛情に溺れて我心中に理非の分別なくなる事。○源氏「これもわりなき心のやみになん」

心残(名)

心に残り惜しと思ふ事。●遺憾。●残念。

心苦(形。形言ク活)

「一」苦しに同じ。「二」氣の毒に思ふ。(雅)

心競(名)

他に負けじさ心中にて競争又は抵抗する事。○新千載「忍ぶるもなげく

心動上(二段)

ためして見る。●試験する。●やつて見る。

もはてのいかならん我身一つの心くらへに」

心組(名)

心構(名)

心中の豫定。●心構。●心持。  
(形。形状言ク活) おぼつかなし。○萬葉  
「春日山霞たなびく心ぐ、照れる月夜に獨  
かも寐む」

心遣(名)

氣晴らし。●憂さ晴らし。●鬱  
散。

心置(名)

(形。形状言シク活) 心中の腦ましき。●  
氣のむしゅくする。●じれつたい。(雅)

心安(名)

(形。形状言ク活) 「一」少しも心配  
のなき。●安心なる「二」懇意である。●親  
密である。

心待(名)

心の中にて待つ事。

心優(名)

想像より實際の優る事。●思  
ひしよりもよき事。

心假粧(名)

他の愛を受けん事を獨り心  
中に期してする假粧。○源氏「世にめでら  
れ給ふ御有様をゆかしきものに思ひきこえ  
て心げさうしあへり」

心太(名)

海草の名。まころてん。

心深(形。形状言ク活)

「一」思慮の淺か  
らぬ。「二」深情な。●深切な。

心察(名)

(副) 特別に注意して。●心格段  
に引きつくりひて。(雅)

心剛(形。形状言ク活)

強情な。●心づよ  
し。(雅)

心得(名)

心得る事。又は心得べき事。

心合(名)

互に親愛して相思ふ中。

心合の方(名)

心合の方へ吹き行く  
風。(催馬樂)

心當(名)

心にて思ひ當たる事。●こゝ  
ろあて。●けんたう。

心當(名)

推量。●けんたう。

心淺(形。形状言ク活)

「一」思慮の深か  
らぬ。「二」薄情なる。

心懸(名)

胸騒ぎに同じ。

志(名)

「一」志す事。●物事を成し遂げん  
とする精神。●思ひ込み。●氣込。●目的。  
●見込。「二」死者を追吊せんとするの志。  
○「志の日」志の念佛」

志(他動四段)

目的とする方へ心に向ふ。

●思ひ込む。

志(他動四段) 目的とする。

心際(名) 心持。●心意氣。

心清(形。形状言ク活) 心中の潔白なる。

●心中に妨げらるゝ他の念慮のなき。●心すし。 (雅)

心穢(形。形状言ク活) 心中の潔白ならぬ。●未練なる。

心肝(名) 心と肝と。

心行(自動四段) 精神の全く其方に吸ひ取らるゝ。●愉快の極に達する。●満足する。

(雅)

試(名) 「一」試むる事。●ためし。●試験。

「二」最初に物事を爲す事。

心知(名) 知り合ひ。●知己。●懇意(空穂)

(名) 用意。●注意。●心中の準備。(雅)

(形。形状言ク活) 「一」不安心に思ふ。

●氣がかりに思ふ。●覺束なし。「二」待遠し。○落窪「夜も明けなんこ心もさなくいひあひす」

心持(名) 心に感ずる様子。●心地。●氣持。

心設(名) 心の中にて準備する事。●心支度。●心構。

心(自動サ變) 心を付くる。●注意する。●用心する。●加減する。

「こゝだに同じ。○萬葉「秋の夜を長みにかあらむなぞこゝばいの寐らえぬも獨し寐れば」

「こゝだくに同じ。(又)「こゝばくに。みこの祖父にて」

物事を言ひ起す時の詞。○「こゝに古を考ふるに」

於是(副) そこで。●其わけて。●其場合で。

(副) 手にて揉む音。●しゃりくみ。○萬葉「机の島の辛螺しただまを。云々。辛鹽にこゝもみ」

小言(名) 「一」不平なまじぶやく言。「二」叱責する言。

心地(名) 「一」心持。●氣持。●氣分。「二」流



こころよし

心の疫癘。○水鏡「世の中こころおこりて」心地好(形。形状言ク活)こころよしに同じ。

こころあし

心地悪(形。形状言シク活)「一」心持のあしき。●不愉快なる。「二」病にて氣分のすぐれざる有様。

こころ

(名) 心に同じ。(萬葉東歌)

こころぬか

九日(名) こころのかに同じ。

こころ

(自動四段) 寒氣に觸れて凝り固まる。

こころだ

(副) こころばく。●多く。●あまた。○萬葉今更に妹に逢はめやと思へかもこころだ我胸おほいしからむ」

こころだく

(副) こころばく。●多く。●あまた。(又)こころだくに。(又)こころだくも。○萬葉「こころだくも茂き戀かも△(形)こころだくの。○祝詞式「こころだくの罪出でむ」

こころづ

枯骨(名) されたる骨。●死後久しく立ちたる死骸。

こころら

(副) 多く。●あまた。●幾つとも無く。○源氏「中宮に宮たちあまたこころらおまなび給へるに」△(形)こころらの。

こころら

(代) ここのあたり。●此邊。

こころん

古今(名) 古き今き。●むかしいま。(自動四段) 屈むに同じ。

こころむ

(他動下二段) 屈まする。

こころん

五言(名) 漢詩の一體。五字づゝにて一句な成したるもの

こころう

股肱(名) 股と肱との如く身の頼みにする人。

こころう

糊口(名) 口に糊する事。●生活し得る丈の食を得る事。△(動)糊口す。

こころう

虎口(名) 虎の口の如く極めて恐ろしき場所。又は場合。

こころう

五港(名) 現今五箇所の貿易港。横濱、長崎、神戸、新潟、函館。

ごかう

五更(名) 時刻の稱。午前四時頃。

ごかう

御幸(名) 上皇のみゆき。

ごかう

九(形) 九つの。○「こころの月」「こころの文」

ごかう

九日(名) 「一」九晝夜。「二」月の第九日目。

ごかう

九重(名) こころのへに同じ。禁裏。○古今「こころのかざねの中にては。嵐の風もきいざりき」

ごかう

九夜(名) 九晩。

ごかう

ごかう

ごかう

ごかう

九九のそぢ

九十(數) くじふ。

九九の

九(名) 明治五年以前時刻の名。夜の子の刻。さ晝の午の刻。今の午前、午後十二時にあたる。

九九の

九(數) 五に四を合はせたる數。●く。

九九の

九の(形) 九つの。○萬葉「こゝの一千等」

九九の

九重(名) 「一」九つ重なる事。●多く重なる事。「二」禁裏。●内裏。●御所。

九九の

九重座(名) 兜の名所。八幡座の一名。

九九の

五穀(名) 人生に必要な五種の穀類。米、麥、粟、黍、豆。

九九の

小聲(名) 小なき聲。●低き聲。

九九の

凍(自動下二段) 寒氣に觸れて身體の感じが無くなる。

九九の

粉米(名) 白米の搗かれて碎けたる粉。

九九の

粉米櫻(名) 木の名。低くして叢生し春の末粉米の如く白く細かき花咲くもの。

九九の

(形。形状言シク活) 大やうである。●こせつかぬ。(雅)

九九の

小腰(名) 腰に同じ。(形。形状言シク活) 岩などの凝り時ちたる有

様。●噉し。○萬葉「岩が根のこゝしき道

九九の

小御所(名) 昔し禁中にて將軍の參内せし時休憩所として設置せられたる詰所の稱。

九九の

後五百歳(名) 釋迦入滅後に五の五百歳あり其第五の五百歳を云ふ稱へ。此時は佛法末期の初なり云ふ。(佛敎)

九九の

此許(代) 「一」手近の處。●此邊。「二」私方。

九九の

●當方。●手前。

九九の

肥(名) 植物を肥やす爲め土地に撒布するもの。人糞、干鰯、油玉等の類。●こやし。●肥料。

九九の

聲(名) 「一」動物の喉より出づる響。●おん。「二」すべて響。●おこ。○「松風の聲」「水の聲」

九九の

「三」漢字の音。○「聲に讀む」

九九の

御影(名) 畫にかきたる神佛などの御姿。護衛(名) 「一」付き従ひて警衛する事。(△(動)

九九の

「二」護衛の人。御詠歌(名) 「一」神佛の詠じ給ひしさいふ和歌。「二」特には三十三番觀音の詠じ給ひし

九九の

さいふ和歌。願禮などの歌ひあるくもの。聲變(名) 「一」音聲の常々變はりたる事。

〔二〕男子十五六歳にして少年の音聲より大人の音聲に移り變はる事。

聲柄(名) 聲のたち。●聲の性質。

肥田子(名) 肥料の人糞を入れて運ぶ田子。

大宴後の小宴。(源氏)

音博士。

讀經念佛などして佛に手向くる事。(謠曲)

多人數の聲。

〔一〕壁を塗る道具。鐵にて作り木の柄を付けたるもの。〔二〕又同じやうの形にて衣類などの敷を延ばす道具。

〔一〕武器の名。鏡に附屬して腕を被ふもの。〔二〕射術又は劍術にて腕を被ふもの。〔三〕脇先。

後詰。●後陣。

古風(名) 古風に同じ。

支那上古の五代の帝王。少昊、顓頊、高辛、唐堯、虞舜。

小鐵砲(名) びすさる。

(自動四段) こて／＼する。(俗)

(自動四段) こて／＼する。(俗)

〔一〕古代の儀式。●古禮。●古式。

〔二〕古代の典籍。●古書。●國典。

〔一〕殿の尊稱。〔二〕禁中の建物。〔三〕特に清涼殿。〔四〕貴人の住居。●御箱。

〔五〕神社。

古へ天空の區劃。即ち東、西、南、北、中。

圓碁の賭物の錢。(源氏)

木の名。花の形白く小さき鞠に似て集まり咲くもの。

しつこき有様。(又)こて／＼と。

こた／＼に同じ。混雜散亂したる有様。

(又)こた／＼と。(俗)

濃藍(名) 染色の名。藍の濃きもの。

小葵(名) 〔一〕錢葵の一名。〔二〕古代模様の名。小葵の花を畫がけるもの。裝束などに用ふ。

小鮎(名) 鮎の子。●若鮎。

太蘭にて織りたる筵。

御座(名) 貴人の座する處。●御席。●おまし。

巨細(副) 細大まなくの意。●委細。●詳に。

小前張(名) 神樂歌の部門の名。薦枕、閑

野、穢等、篠波、殖槻、總角、大宮、湊田、香、千

歳、早歌の十一曲之に屬す。

小里偏(名) 漢字の偏の名。陸、院、陣、陽

などの左の部分。

木陰の路。○拾遺愚草「しのぶ山こさち

の奥に飼ふ鷺の其羽ばかりや人に知らる

ます。●入らつしやゑ。

御座。ム(自動四段) 有る居るの敬語。●おぼし

小坂(名) 小さき坂。

小肴(名) 小さき魚類。●雜魚。

小賢(形。形狀言シク活) 小利口な。●ちよ、

小皿(名) 食器の名。皿の小さきもの。

古參(名) 古くより奉公などに參り居る事。...

...新參に對して云ふ。

後三(名) 後三年の畧。

五山(名) 京都にある禪宗の五大寺。建仁寺、

東福寺、相國寺、天龍寺、萬壽寺。

堀河天皇の寛治年中に三年の

間、いりて源義家の清原武衡、家衡等を討

ち平らげたる戰の名。前九年に對して後三

云ふ。

折烏帽子の

一種。後三年の繪卷物に出でた

る形。(圖)

こそあるなれの轉。○こ

そ來りたれ。●こを起りたれ。○平家「不

思議の事こさんなれ」

五三桐(名) 紋の名。桐の

葉の上に中央五輪左右おの

三輪の花の附きたるも

陸(名) 陸に同じ。

田畑を借り其收穫の幾分を地主に納

れ其餘を我得分として耕作する事。

小作人(名) 小作を爲す百姓。

櫻の一種。花の細かきもの。



こくき(名)

小櫻織(名) 鎧の織の名。藍地に小き櫻の花の模様を幾個も白く染め出した革もて織したるもの。

こくさ(名)

醴酒(名) あまざけ。●一夜酒。(和名抄)

こくざ(名)

御座船(名) 天皇、將軍その他貴人の召さるる船。

こくざね(名)

御座船(名) こさふれに同じ。

こくざね(名)

胡沙吹(自動四段) 一説には蝦夷人は口より霧の如きものを吹き出だし。或は敵に逢ひ又は猛獸に出で會ひたる時。此霧の中に我身を隠し其難を遁るゝ事あり。之をこさふくさ云ふ。又一説には蝦夷人木の皮を巻き笛に作りて吹くを云ふ。こさは胡笛なり。

こくざね(名)

笛の音に山氣動き登りて月も曇る言ひ傳へたり。○夫木 こさふかは曇りもぞする陸奥のえぞには見せじ秋の夜の月

こくざね(名)

小雨(名) 細かく降る雨。

こくざね(名)

(句) こさんなれに同じ。○謡曲「阿波沖舟の漕ぎくるは。雨こさめれ今一ッへりも汐汲めや人入」

こくざね(名)

古記(名) 古の記録。

こくき(名)

國忌(名) こくきに同じ。

こくき(名)

古稀(名) 七十歳の異稱。○「古稀の賀」

こくき(名)

小木(名) 小き立木。●若木。(類集)

こくき(名)

古儀(名) 古代の儀式。●古式。

こくき(名)

狐疑(名) 疑念深き事。●邪推。△(動)一狐疑す。

こくき(名)

御器(名) 飯を盛る椀。

こくき(名)

胡鬼板(名) 羽子板の古名。

こくき(名)

筑子(名) 長さ五六寸程に切りたる丸竹の兩端に切籠きりこの形を作り付けたるもの。之を二本拍ち合はせつゝ放下などの歌ひ踊りなどせしもの。○職人盡歌合「月見つゝ歌ふ放下のこきりこの竹の夜聲のすみわたるかな」

こくき(名)

(他動下二段) こき入るゝ。●もぎ取りて入るゝ。○萬葉「五月に花桶を。云々。白妙の袖にもこされ」

こくき(名)

故郷(名) ふるさとに同じ。

こくき(名)

五經(名) 支那古代の五種の經書。詩經、書經、易經、禮記、春秋。

こくき(名)

御形(名) 草の名。春の七草の一つ。

こくき(名)

五行(名) 支那にて云ふ天地間五種の原

素。木、火、土、金、水。

【副】 こきたくに同じ。(記)

こきだ

(自動下二段) 物をこき散らす如く多く降る。○萬代「霞みつゝ空うちきらしこきたれて花の散るこき淡雪ぞ降る」

こきだす

(他動下二段) かきまぜる。●混和する。(雅)

こきぶつ

古器物(名) 古代の器物。

こきまげ

小蚺氣槍(名) 古代笙の名。

こきまう

胡弓(名) 樂器の名。三味線の如きものを弓の如きものにて弾き鳴らすもの。

こきま

呼吸(名) 「一」吐く息と吸ふ息と。△(動) 呼吸す。「二」あなばい。●ぐはひ。

こきし

國王(名) こにきしに同じ。

こきし

肥(自動下二段) 「一」地味のよくなる。「二」身の太る。●肉が附く。

こきし

越(自動下二段) 「一」山、海、河、橋又は高き物の上を通り過ぐる。「二」境目を過ぎて他に及ぶ。○「領分を越ゆ」「月を越ゆ」「三」すぐれる。●まさる。●上に出づる。○「喜びに越ゆるものなし」

こきし

越(自動下二段) 蹴る。(和名抄)

こきし

小結(名) 折烏帽子に二筋の組緒を附けて着る事。又は之を結び付けたる烏帽子。

こきし

父を殺す事。二に母を殺す事。三に佛身より血を出たす事。四に阿羅漢を殺す事。五に和合僧を破る事。

こきし

呼吸(名) 「一」吐く息と吸ふ息と。△(動) 呼吸す。「二」あなばい。●ぐはひ。

こきし

越(自動下二段) 蹴る。(和名抄)

こきし

小結(名) 折烏帽子に二筋の組緒を附けて着る事。又は之を結び付けたる烏帽子。

こきし

父を殺す事。二に母を殺す事。三に佛身より血を出たす事。四に阿羅漢を殺す事。五に和合僧を破る事。

こきし

呼吸(名) 「一」吐く息と吸ふ息と。△(動) 呼吸す。「二」あなばい。●ぐはひ。

こきま

五逆(名) 佛教にて云ふ五箇條の大惡事。一に

こきま

小菊(名) 紙の一種。美濃紙に似て小判なるもの。

こきま

古今(名) 「一」こゝんに同じ。「二」古今和歌集。

こきま

胡琴(名) 琵琶の一名。(教訓抄)

こきま

昔の金銀貨幣。

こきま

織内の五箇國。山城、大和、河内、和泉、攝津。

……是はもと髻に烏帽子を結び付くる爲めの緒にて。頂頭掛なせぬ時に用ふ。(圖)



こゆるぎ

(枕) 相模に小餘綾の磯さいふが有るに、りていそさいふ文字の枕詞に置く。○源氏

「看求むこゆるぎのいそきありくほご」

こゆう

固有(名) もさより有る事。●もさより其特性

として備はり居る事。

こゆみ

小弓(名) 小さき弓。遊戯などに用ふるもの。

こゆび

小指(名) 手足の最も小さき指。

こめ

米(名) 稲の穂より取りたる實。

こめ

穀(名) こめおりの略。○空穂「さて此こめは夏衣にや」

こめい

古名(名) 古き名稱。●舊稱。

こめい

願命(名) 恩命。●有難き仰。

こめがみ

顚顚(名) 眉と耳との間にして。物を噛む時動く所。

こめかし

(形。形状シク活) おぼこらし。●あごけなし。●無邪氣な。○源氏「十四になんおぼしけるいさこめかしう」

こめらば

小女童(名) 小さき女童。(職人盡歌合)

こめん

御免(名) 「一」おゆるし。●御用捨。「二」官許。「三」免官。

こめおり

穀織(名) 絹又は紗の類にて目の透きたる漙き織物。生糸にて織る。其織目の米粒を並べたる形に似たる故にいふ。

こめく

(自動四段) こめかしくある。○紫日記「あま

り見苦しきまでこめい給へり。腹きたなき人あしごまにもてなしいひつくる人あらば。やがてそれに思ひ入りて身をも失ひつべし」

こめぐら

米倉(名) 米を貯蔵する倉庫。

こめや

米屋(名) 米賣る家。

こめふみ

米踏(名) 踏白にて米を搗く事。又は其人。商業上の詞。大小種々取り雜せたる事。

こみ

込(名) 塵芥。●塵埃。

こみち

五味(名) 舌に感ずる五種の味。甘、辛、鹹、苦、酸。徑。小道名) 小さき道路。●小路。

こみそか

小三十日(名) 十二月大晦日の前日。

こみつ

濃漿(名) 炊きたる飯の汁。●おもゆ。

こみや

込矢(名) 銃砲に彈藥を込め或は其筒を掃除す

るために用ふる鐵棒。

こし

腰(名)

〔一〕背の下。尻の上のまゝころ。〔二〕袴の腰に當たるまゝころ。〔三〕裳の紐。○夫木「雲の上に玉裳のこしを引つけてのぼりぢやらぬ天つ少女子」〔四〕刀を數ふる詞。○太刀「腰」〔五〕すべて腰の如く物の下部になりたるまゝころ。

こし

輿(名)

乗物の一種。屋形の下に二本の棒ありて人をして昇かしむるもの。

こし

古詩(名)

〔一〕古人の詩。〔二〕漢詩の一體。平仄の用法と句數の長短とに一定の制限なきもの。

こし

古史(名)

古代の歴史。●古記録。

こし

越(名)

今の越前、越中、越後、加賀、能登地方の古稱。

こし

濃(形。形状言ク活)

深く厚し。●多く繁し。

こじ

巾子(名)

冠の名所。高く柱の如く立ちて纒の付きたる處。

こじ

居士(名)

〔一〕仕官せずして民間に居る士人。〔二〕戒名にては男子の尊稱。

こじ

故事(名)

古に有りし事實。●例に引かれて出處

こなる事蹟。

ごし

互市(名)

外國との交易。●貿易。

ごじ

兀子(名)

ごつしに同じ。(雅)

ごじ

五時(名)

正午或は夜中より五時間目。

ごじ

午時(名)

正午。●眞晝。

こしゐ

腰居(名)

腰の立たぬ片輪者。●わざり。(著聞)

こしいた

腰板(名)

〔一〕障子などの下部に張りたる板。〔二〕袴の腰に當てる板。

こしいれ

輿入(名)

婚禮の時。嫁の輿を婿の家に送り入るゝ事。

こしろ

子代(名)

古へ御子のましまさぬ皇族のために定めたる名代なしろ。……名代を見よ。

こじろ

小城(名)

小さき城。

こしば

小柴(名)

〔一〕小さき柴。〔二〕小柴垣の略。(源氏)

こしばり

腰張(名)

壁などの下の方に紙を張る事。

こしばがき

小柴垣(名)

小さき柴垣。

こしばせ

(名)

腰の様子。●腰付。

こしばそ

腰細(名)

腰の細き事。……多くは美人の形容。

こしばね

腰骨(名)

腰の下部にある大なる骨。●臍骨。



●監督。●扁骨。●大骨。●硯骨。●骸骨。

こじらみ

小菴(名) 小き菴の窓。●古へ禁中にては殿上の間にありたるもの。

こしぢ

越路(名) 越の地方へ行く道。

こしぢにち

後七日(名) 古へ眞言院に於て正月八日より御修法を行はれたる其七日間の稱へ。◎前の元日より七日までの一週間に對して後さいへり。

こしぢにち

五七日(名) 人死して後三十五日目の稱。此日佛事を爲す。(玉葉)

こしぢにちのあざり

後七日の阿闍梨(名) 東寺の長者にて後七日の御修法を勤むる僧。

こしぢのきり

五七桐(名) 紋の名。桐の葉の上に中央七輪左右各五輪の花を並べたるもの。

こじり

鑑(名) 刀の鞘の端。

こしめけ

腰拔(名) (一)腰の番ひの外れて立ち得ぬ人。(二)無氣力者。

こじる

(他動四段) 棒など差込みて其物を動かし又は引き離す。

こしなれ

腰折(名) (一)腰の折るゝ事。又は其物。(二)和歌の下の句くだけて上の句と掛合はぬ

こしをれうた

事。又は其歌。腰折歌(名) 下の句くだけて上の句と掛合はぬ歌。●拙作の和歌。

こしをれぶみ

腰折文(名) 拙作の手紙。腰帶(名) (一)女の帯を締めて後。更に衣の裾をかゝぐるために結ぶ細帶。(二)能装束の附屬品。

こしおひ

腰に結びて其端●短冊の如き處を前に垂らすもの。束帶の下緒に似たり。(圖)

こしかた

來し方(名) 過ぎ去りたる方。●既往。●過去。

こじがた

巾子形(名) 門の中央に打ちて左右の扉を支へ止むるための低き杭。

こしがたな

腰刀(名) 佩く太刀に對して腰に差す刀を云ふ。●脇差。

こしかけ

腰掛(名) 腰を掛くる臺。

こしかけぢや

腰掛茶屋(名) 路傍に腰掛を並べて客を待つ茶屋。

こしかき

與昇(名) 輿を昇く人。●駕輿丁。

こじがみ

巾子紙(名) 金巾子の御冠の時。纒を巾子に



挾まする紙の稱へ。檀紙に金箔をだませ申を裂きて巾子き纏を其中に貫き入るゝもの。

こしよ

古書(名) 古代の書物。

こしよ

御所(名) 天皇上皇皇后などのおほします所。●禁裏。●内裏。●皇后。

こしよごころ

御書所(名) 役所の名。古へ禁中の御書物を出納管理せしところ。

こしよがき

御所柿(名) 柿の一種。其實大きく四角張りて味甘きもの。

こしよシヨウ

小姓(名) 武家にて貴人の側に侍する少年。●扈從。

こしよシヨウ

故障(名) 事に臨みての障り。●事故。●障礙。●差支。●苦情。

こせシヨウ

胡椒(名) 香料の名。熱帯植物の實を細末にせしもの。薬品又は薬味として貴重す。

こしよシヨウ

後生(名) 〔一〕死して生れかばる事。〔二〕未來の世。●來世。●あの世。〔三〕來世にて極樂に行く事。……(佛教)

こしよシヨウ

五障(名) 佛教にて云ふ女の五種の障害。一には梵天王となるを得ず。二には帝釋とな

るを得ず。三には魔王となるを得ず。四には輪轉聖王となるを得ず。五には佛身となるを得ず。

ごじよシヨウ

五常(名) 人倫の履行すべき常の道。仁、義、禮、智、信。

ごじよシヨウらく

五常樂(名) 雅樂の曲名。

こしよく

古色(名) 時代を経たるらしき色。●さびたる模様。

ごしよぐるま

御所車(名) 古へ禁中に入入する貴人の乗りたる故の名。◎屋形ありて牛に挽かする車。●牛車。(圖)

ごしよざくら

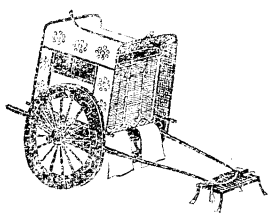
御所櫻(名) 櫻の一種。八重にて大きく美しきもの。

こしだか

腰高(名) 食器の名。高坏に同じ。故實(名) 古代の禮法儀式などにして例證模範とすべきもの。

こじづく

(他動下二段) 道理らしく云ひ紛らす。●理屈を付くる。



こじつげ (名) こじつくる事。●こじつけたる事。●

牽強附會。

こじつぎ 腰纏(名) 袴の一種。大口に似て短きもの。生の平絹又は布にて造り差貫の下に着す。

こしなほり 腰繩(名) 罪人の腰に付くる繩。

こしらふコシラフ 拵(他動下二段) 「一」造る。●製する。「二」なだめる。●だます。●つくろふ。

こしらへコシラヘ 拵事(名) 實事らしく云ひなす偽り。●造り事。

こじん 古人(名) 古の人。

こじん 故人(名) 「一」世を去りたる人。「二」古なじみの友。

こしん 護身(名) 身の守り。又は其守りとなるもの。

こじん (佛教) 吾人(名) 我々。●我輩。●吾曹。

こしんのみだ 己身の彌陀(句) 極樂は遠くにあらず悟れば己が身の中に彌陀佛はましますの意。

(佛教)

こじしゅうざん 小舅(名) 夫の兄弟姉妹。

こじしゅうざめ 小姑(名) 夫の姉妹。

こしもの 腰物(名) 刀の異名。

こじく 乞食(自動四段) 乞食する。○武將感狀記「破笠身には取り着てこじくまも天の下には蓑は頼まじ」

こしや 牛車(名) 牛の挽く車。……三つの車を見よ。

こしやく 語釋(名) 言語の解釋。

こしま 小島(名) 小さき島。

こしきま 腰巻(名) 「一」古へ夏女の腰に纏ひたる衣。生絹などにて作る。(圖)

こしきま (二)下帶。●ゆもじ。「三」兜の名所。

こしけ 腰氣(名) 女の腰の下の病。●子宮病。

こしごろも 腰衣(名) 僧衣の一種。腰にのみ纏ふ短きもの。

こしこばた 腰小旗(名) 兵士出陣の時。味方の目印として各の腰に提ぐる短冊の如き小さき旗。

こしあん 漣銘(名) 食品の名。銘の一種。漉して小豆の皮を去りたるもの。

こしあめ 小雨(名) 小雨に同じ。○散木「こしあめふりて葎さく野な」



葎さく野な」

こしざし

腰刺(名) 腰絹に同じ。

こしや

轂(名) 車の名所。輪の中央にありて心棒を貫く所。(和名抄)

こしき

飯(名) 古へ飯を炊きたる器。今の蒸籠の類。

こじま

乞食(名) 人の門に立ち又は通行人に頼りて食品錢など乞ふ事。又は其人。●物貰ひ。●乞丐。●こつじき。

ごしき

五色(名) 色の中の主たるもの。青、黄、赤、白、黒。

こしざぬ

腰絹(名) 貴人より人に賜はる料の卷絹。賜はればやがて腰に指し入れ退出するもの。(空穗)

こしきぬの

飯布(名) 飯の底に敷く布。

こしきわら

飯藁(名) 飯の底に敷く藁。

ごじけ

五時教(名) 五つの時期に分ちて釋迦の順次に説きたる教法。すなはち五部の經文。

華含經(三十七日間)阿含經(十二年間)方等經(十六年間)般若經(十四年間)法華經(八年間)。(佛敎)

こしざんちやく

腰巾着(名) 腰に着くる巾着の意より轉じて小兒などの何時も其腰に纏はり付きて

ごしやうやうえ

側を離れぬ事の喩。五色榮螺(名) 榮螺の一種。五色の光ありて美しきもの。

こしゆ

戸主(名) 家の主人。

こしの

古酒(名) 新酒に對して去年又は其以前に醸したる酒をいふ。

こしゆひ

腰結(名) 裳着の時其腰を結ぶ人。元服の烏帽子親の如く父などのする事。(源氏)

ごしやう

故主(名) 元の主人。●舊主。

ごじふおん

五十音(名) 發音の種類により分類したる五十の音。……「あいうえお」以下「わお」をしまでの稱へ。

こしみの

腰篋(名) 篋の一種。腰に纏ふもの。

こししゃうじ

腰障子(名) 障子の一種。下の部分を板にて張りたるもの。

こしびやうぶ

腰屏風(名) 屏風の一種。丈の低きもの。

こしもと

腰元(名) 〔一〕貴人の小間使。●侍女。●侍婢。〔二〕妾。

こひ

古碑(名) 古き石碑。

ごび

語尾(名) 語學上の詞。動詞形容詞などの變化(活)

用)すべき部分。

こびさ 小人(名) 〔一〕非常に丈低き人。〔二〕徳川時代  
武家に使はるゝ走り使の役。又は大名の通  
行道を警衛し罪人を捕ふる小役人。

小人目附(名) 小人を管する目附役。

こびさめつけ 小人嶋(名) 非常に丈低き人の生息するこ  
いふ想像の島。●小人國。

こびさじま 小泥(名) 泥に同じ。●ごる。

こびさち 染色の名。茶色の濃くして稍や黒みたる  
もの。

こびさちや 小兵(名) 〔一〕小さき弓を引く人。●弱弓。  
〔二〕身體の小さき人。

こびさつ 古筆(名) 〔一〕古代の筆蹟。●古人の書蹟。〔二〕  
古筆の鑑定家。

こびつ 小櫃(名) 小さき櫃。古代の人の甌弄物に作り  
たるもの。(土佐)

こびさ 小膝(名) 膝に同じ。

こびさき 木挽(名) 材木を引き割る事。又之を業とする  
人。

こびさく 誤謬(名) 文字などの上の誤り。

こも 菰。薦(名) 〔一〕水草の名。芦の類にて莖に織るも

こもばり 薦張(名) 假小屋などの周圍を薦にて張り隠  
す事。

こもち 子持(名) 子を持つ事。●子を持つ人。

こもち 御物(名) ごもつに同じ。

こもちつき 小望月(名) 八月十四日の月。…十五日  
の望月に對して。

こもちすぢ 子持筋(名) 一本は幅廣く一本は幅狭き上  
下二本の筋。

こもり 子守(名) 〔一〕小兒に付き添ひて番をする事。  
又は其人。〔二〕出産および生兒を守護する  
神。

こもり 木守(名) 樹木の番人。●庭番。(枕)

こもり 籠(名) 神社佛閣に參籠する事。

こもりたう 籠堂(名) 神社佛閣にて諸人參籠する爲め  
の堂。

こもりぬ 木陰草陰などに隠れたる沼。(萬葉)

こもりぬの (枕) 物の下になりたる意にて下に掛かる  
枕詞。(萬葉)

こもりづ (名) 木陰草陰などに隠れて流るゝ水。(萬  
葉)

こもりづま

(枕) 物の下ゆく意にて下に掛かる枕詞。

(記)

こもりづま

(名) 隠し妻。●密に相逢ふ女。(萬葉)

こもりく

(枕) 初瀬(大和の地名)の枕詞。初瀬(長谷)は谷深く入り込みたる地なれば籠國にて元は其形容詞なるべし。(萬葉)

て元は其形容詞なるべし。(萬葉)

こもりえ

(名) 木陰草陰などに隠れたる江。

こもる

籠(自動四段) 「一」其物の内に入りて外に出でぬ。●さかこもる。「二」隠れて見えぬ。「三」神社佛閣などに祈願のため參籠する。

ぬ。●さかこもる。「二」隠れて見えぬ。「三」神社佛閣などに祈願のため參籠する。

こもだたみ

薦疊(名) 菰にて作れる疊。

こもだたみ

薦疊(枕) 幾重も重ねて編むの意にてへにかゝる枕詞。○萬葉「こもだたみ平群の山」

かゝる枕詞。○萬葉「こもだたみ平群の山」

こもそう

(名) 虚無僧の轉。

こもつ

御物(名) 帝室御所藏の物品。

こもん

小紋(名) 染模様の名。細かき模様を一面に置きたるもの。

きたるもの。

こもん

顧問(名) 相談相手となる人。

こもんくわん

顧問官(名) 政務の顧問たる官職。

こもんじょ

古文書(名) 古代の文書。

こませう

虚妄(名) うそ。●偽り。

こまづら

高麗人(名) 高麗の國の人。

こもの

小者(名) 下部。●下僕。●下男。

こもの

籠物(名) 籠に入れたる果物。贈物にするもの(源氏)

こもく

(名) 塵。●あくた。●こみ。

こもくらへ

五目並(名) 遊戯の名。碁石を双方互に並べて先に五目一筋にならびたるを勝とするもの。

こもぐすし

五目鯨(名) 食品の名。鯨の一種。種々の魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

五目鯨(名) 食品の名。鯨の一種。種々の魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

五目鯨(名) 食品の名。鯨の一種。種々の魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

こまぐすし

魚肉野菜など交へたるもの。

御前(名) 女の尊稱。○「母御前」「尼御前」

小勢(名) 「一」少數の軍勢。「二」小人數。

古へ禁中にて豊明節會(十二月中の辰

袖を五度返して舞ふもの。……先づ其準備

あり。寅の日に殿上の淵醉、御前の試あり。

卯の日に童女御覽などの式あり。

禁中にて五節の舞姫の詰

所。

古へ禁中にて行はれたる年中五

種の節會。元日、白馬、踏歌、端午、豊明。

願の詞。●て貰ひたいが、そうはで

きまい。○萬葉「吉野川ゆく瀬の早み暫

くも通はぬ事なく有りこせぬかも」

漢詩の一體。五言絶句。

(自動四段) こせくする。(俗)

年中五種の節句。七草(正月七日)

上巳(三月三日)端午(五月五日)七夕(七月

七日)重陽(九月九日)。

攝政たるこまを得る五つの家柄。

近衛、鷹司、一條、二條、九條。

古代の錢。

三月の異名。

相互に選舉し合ふ事。△(動)一互選

す。

「一」貴人に供ふる膳。「二」轉じて食

事。「三」又轉じて飯。

正午より前の時刻。●晝前。

「一」神、佛、貴人の前。「二」前驅。

「一」貴人を呼ぶ詞。「二」貴人の妻を

呼ぶ詞。

古戰場(名) 古へ戦争のありたる場

所。

貴人の御前に出で、する書物

の講釋。

織物の名。袴の一種。越後の

國五泉町近傍より産するもの。

せはしげなる有様。●小さく狭くして

物の多き有様。(又)こせく。(俗)

戸籍(名) 人民の毎戸の人數生死等を記載して

官に控へ置く帳簿。●人別帳。

こせき

古跡(名) 古へ有名なる建物などのありたる場所。●古へ著しき出来事のありたる場所。

●奮蹟。

こせき

古昔(名) むかし。●いにしへ。

こす

小簾(名) をすに同じ。○頼政集「木の葉吹く風やこすをあげつらん拂ふに惜しき塵のつもれる」

こす

越(自動四段) 越ゆに同じ。

こす

漉(他動四段) 流動物の滓を去る爲めに細かき隙を通過させる。

こす

(他動上二段) 草木を根ながら抜き取る。

こす

湖水(名) みづうみ。

こす

太鼓を打ち笛を吹く事。△(動)―鼓吹す。

こす

午睡(名) 晝寢。

こす

五衰(名) 人間界に比べては快樂極なき天上界にても命終る時に臨みては遂に免かるゝこ能はずさいふ五種の衰態。一には頭上の花鬘萎み。二には天衣塵垢に著かれ。三に

は腋下より汗出で。四には兩目しぼく胸

き。五には本居を樂ます。是なり。此く相

現する時は他の天女に悉く見放され林間に

臥して泣く外なしといふ。○謡曲「かさし

の花もしな〜さ。天人の五衰も目の前に

見えてあさましや」(佛敎)

小水龍(名) 古代横笛の名。村上天皇の御

物たりしもの。

擦(他動四段) すりうごかす。●摩擦する。

梢(名) 木の末。●木のうら。

小杉(名) 紙の名。杉原紙の小判なるもの。

